穢れなき子供たちへ

天崎　剣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
穢れなき子供たちへ

【Ｎコード】
Ｎ１６５２Ｆ

【作者名】
天崎　剣

【あらすじ】
都市鉱山の発掘を行う便利屋の流は、そこで乳児の遺体を発見する。「未成年保護法」監視下の日本、死刑か終身刑の重罰が科せられるとわかっていても、こうした事件は絶えない。死への恐怖と、自身の抱えた過去との葛藤、そして都市鉱山を狙う姿なき者との攻防。それは、「未成年保護法」によって守られた、無垢なる未成年たちとの戦いでもあった。【完結】

Ｅｐｉｓｏｄｅ０１：都市鉱山

夏が終わり、暑さも落ち着いてきたが、九月半ばを過ぎても三十度以上の夏日が続く。汗は止め処なく出、拭っても拭ってもキリがない。レジ袋に用意してきたペットボトル数本、ぬるくなったが仕方なく何度も口に運ぶ。炭酸が抜けたコーラは美味くはないが、この際、飲み物ならばなんでもいい。補給しないと、水分が全部空気に吸い取られていくような気持ちさえしてしまう。

目の前が蜃気楼のように揺らぐ。ウミネコが数羽、からかうように頭上を飛び交う。鉛のように重たくなった空気と、足元のゴミの山をかき分けかき分け必死に歩いた。仕事でなければこんな場所に、こんな暑い日に来ることなんてない。思いながら流（ながれ）は、ゴミ埋立地に立っていた。

世界の資源が尽き始めた二十一世紀末、日本は都市鉱山の本格的な開拓に乗り出す。都市鉱山というのは、電化製品など、都市部で多く排出されるリサイクル可能なゴミの山のことである。レアメタルと呼ばれる希少金属が多く使用される携帯電話やパソコンなどの精密機器もさることながら、価格が高騰し輸入困難となった鉄や銅などが大量に使用されている家電などは、いわば資源の宝庫。埋め立てゴミとしていた粗大ゴミや大量の廃車の中から、それぞれの金属を取り出して資源に変えていくのだ。

生産と消費を繰り返し成長してきた日本経済、都市鉱山の埋蔵量は年々膨れ上がった。金や銀、インジウムや錫、タンタルなどは、世界の現有埋蔵量の二割を超え、その高い技術により再生成されたレアメタルは貴重な輸出資源へと変化していた。また、積極的に日本の中古家電を買い取っていたアジアの各国も、日本の技術力を取り入れようとしたが断念、結果、一度輸出された中古家電を再輸入するという歪曲現象が生じたのである。

金属再生工業という新しい産業が発生し、ゴミの埋立地から家電

を回収、分解して種類ごとに再生工場に持ち込むと、その純度や量に応じて報酬を払う制度が確立された。
この「金属資源再生制度」を、流の所属する便利屋一ノ瀬が見逃すはずがない。暑い暑いと文句たらたらに作業を続ける流に、一ノ瀬は涼しげな顔で遠くから手を振った。
「流ー！　サボったら報酬カットだぞ！　真面目にやれ！」
それはわかってるよと、流は顔をしかめて舌を出した。だけど、一ノ瀬にこっちの顔なんか見えやしない。ゴーグルをかけ、マスクがわりに口元に巻いたタオルであごから伝う汗を拭う。こっちはゴミの中、あっちは冷房のついた監視小屋の中。長靴の中もつなぎのズボンも、Tシャツまで汗でだくだくだというのに、ヤツは数百メートル離れた涼しいとこから拡声器で、しかも名指しで指摘してくる。
「うるせー。いつかその頭の毛、全部剃ってやる」
流はシャベルを必死に動かし、危険物に埋もれた家電を探し続けた。
他の仲間は運転席にクーラーの付いた大型の人型ショベルカーで掘り返し、下っ端の流はその跡地を追いかけるようにシャベルで掘っていく。いつぞやも、我慢できずに一ノ瀬に言ったのだ。「俺ばっかりこんな役回りじゃやってけねーよ」しかし、一ノ瀬はその薄くなった頭をゆらりゆらりと動かしながら、流を見下した。
「お前のような役立たずを雇ってやるだけでもありがたいと思え。今時、社会保障までしっかりサポートしてくれる会社なんて稀なんだぞ。こんなことでへこたれてちゃ、将来の蓄えがどうのなんて大口叩いてもどうなるかわかったもんじゃねえ」
思い出せばむかむかするが、確かに暮らしにゃ困ってない。仕事はきついが、寝る場所と喰うものがあるだけマシ、そう思って今まで頑張ってきたんだ。今更辞める気なんてさらさらない。が、せめてあの、禿げるなら禿げてしまえばいいのに中途半端に留まったヤツの頭の毛を全部剃ってやらないことには気がすまない。そんなく

だらない執念だけで、流は動いていた。
一度埋め立てられた家電の掘り起こし作業は容易でない。土が入り込みしっかり固まったのを、重機と手作業で掘り出すのだ。まるでそれは、化石の発掘作業のよう。しかし、酸化していない貴重な金属がその中に埋まっていると思えば、諦めて頑張るしかない現実もある。例え形が変わっていようとも、金属は金属。綺麗に掘り出して洗浄すれば立派な資源だ。
掘り返しの作業が一段落し、ショベルカーに乗っていた先輩の田村が流のそばに駆け寄った。ここは丁度一週間前に彼らが掘り起こしたところだ。
「どうだ、流。いいのあったか？」
ちょっと太目の中年の田村は、真っ黒に日焼けした顔をこちらに向けて、冷えたペットボトルを投げてよこした。流は待っていましたとばかりに、シャベルを放り出して飲み物をキャッチする。
「お、サンクス田村さん。まあ、携帯電話がいくつかまとまって埋まってるけど、あとはガラスや陶器類やらどうしようもないもんが多いな。家具や廃材は木材チップに加工するんだろうから有効としても、どれほどのものが資源として再利用されるんだか。しかも、この辺りはガチで家庭ゴミゾーンらしくて、妙な臭いや物体が入り混じってるんですよ。俺一人じゃちょっときついから、たのんます」
ゴーグルと軍手を外し、口元のタオルをぐいと押し下げる。蓋をこじ開け飲み干すスポーツドリンクの爽やかさが喉に心地いい。
「誰も、流ひとりにやらせてるわけじゃないよ。機械でやるところは機械で、後は結局人力じゃないか。ま、デカい家電が埋まってたら、油圧アーム使わないとどうしようもないけどな。これが世界のためになってると思えば、諦めもつくってことで」
がははと笑う田村を、流は白い目で睨んだ。
「けど田村さん、この臭いはないと思うぜ。暑さに、何か物が腐ったような鼻の付く臭いときたら、普通じゃねぇ。三日前に来たときはこんなに臭わなかったはずだけど。暑さが過ぎるから、掘り返し

たゴミが腐ってくんじゃねぇの」
「馬鹿だな、流。ここは埋め立てゴミの処理場だろ。生ゴミじゃねぇんだ。腐ったりしないよ」
「田村さんは、キャリア長いから、身体がゴミの臭いになって気付かないだけなんじゃないの。かなり来るよ。鼻を突き刺すような腐敗臭」
腰に巻いたポーチに引っ掛けたタオルを引っ張り、体中の噴出す汗をごしごしと拭きながら、流は一度放ったシャベルを拾った。そしてぐるると辺りを見回す。
よく言う、東京ドーム何個分というのは分からないが、隣接する海のギリギリまでゴミの山らしい。水平線が微かに見えるものの、ゴミの山の陰になって、ありがたみの欠片もない。ここまで数年掘り返しを続けても、掘削できたのは全体の数パーセントにも満たない。捨てるのは一瞬、これを資源として活用するために分別するには、途方もない月日が掛かる。一部有害物質が含まれている可能性を考慮して、慎重に掘り進めている現実もある。
日本はここまで追い詰められているのかと、誰もが思う。こんな仕事が事業として成り立つこと事態嘆かわしい。それでも、自分の親、その親の世代から受け継がれてきたこのゴミの山が、宝へと変わるのだから、技術力の進歩を感謝すべきか。
「確かにな、この臭いは格別だな。流の言うように、何かが急激に腐っているような臭いだ。臭いの発信源が分かれば、ユンボで撤去するんだが」
田村も同様につなぎの腰に手を当てて辺りを見回した。息を吸い込むと確かにつんと来る、不快な臭い。視界を右に左にずらし、やっと何かを見つける。
「おい、流。あのビニル、お前のか？」
五十メートルほど先に、パサパサと揺らめく白い新しげなレジ袋が見えた。流は自分の足元のペットボトル入りのビニルを確認して、
「いや、俺のはこっちッス」

指差し、田村の指示する方向に歩き出す。ちょっと見てきますと一言、軍手をはめなおしながら掘り返されたゴミの山を慎重に進んでいく。

臭いが徐々にきつくなる。アレが臭いの発信源かと納得しながら、流はそれに近付いた。嗅いだことのない、変な臭いだ。生ゴミが腐ったとき、いや、肉が腐ったとき、いいや、違う。もっともっと、特殊で不快な臭い。辺りをぶんぶんと蝿が異常に飛び交う。その数は謎のビニルに近付くにつれて急激に増し、視界が真っ黒な霧で覆われてしまったかのようだ。流は思わず両腕で顔を覆った。鼻に当たる軍手の臭いが妙に爽やかに感じられるほど、そこの空気は澱んで腐っている。

レジ袋まで数メートル、中から茶色のものがはみ出して見えた。流は恐る恐る、目を凝らした。慎重に、慎重に、歩を進め、腰を屈めながら覗き込む。

「ああ！」

途端に、流は自分の大きすぎる悲鳴に驚いた。がたがたの足場にはまって体勢を崩したところに、右手のスコップが挟まって宙吊り状態になる。

「おい流！　何してんだ！」

田村が遠くから叫んだが、流の耳には殆ど届かなかった。目の前の衝撃的な物体を指差し、がたがたと震えるのが精一杯だったのだ。

蝿が流の頭上を飛び交った。ぶんぶんと耳障りな音と、自分の身体から恐ろしい勢いで失われていく水分、カラカラに渇いていく喉。声にならない声と、ぱくぱくと金魚のように開け閉めを繰り返す口は、流の衝撃を存分に表していた。

のっしのっしと大きな身体を揺らしながら田村が歩み寄る。決して平坦ではない足元は、四十代の田村にはきつかった。はあはあと息を切らし、蝿の大群が舞う現場へと到着すると、流の身体をひょいと持ち上げ、大丈夫かと背中をさすった。

「どうした、何を見た、流」

未だ指すことをやめない指先を辿ると、例のビニルに突き当たる。
田村は怪訝そうに眉をしかめると、流をその場に置いて、更に一歩一歩、それに近付いた。田村の鼻にも、その不快な臭いは嫌なくらい突き刺さっていた。どこかで嗅いだ臭い、そして、決して嗅ぎたくない臭い。
「死体だ」
ぼそっと、田村は呟いた。
小さく丸い、茶色く変色した掌がビニルの外に助けを求めていた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ０２：死臭

事態はけたたましく動いた。

レジ袋に放置されているのが乳児の遺体だと確認すると、田村は持っていた携帯電話で急いで一一〇番通報した。腰が抜けて動けなくなった流を背負って、彼は現場を後にする。騒いで現場を荒らすわけにはいかないのだ。プレハブに毛を生やした程度の大きさの監視小屋まで、田村は半分気を失いかけた流を励ましながら歩いた。

作業中だった便利屋一ノ瀬の面々も、慌しく重機から降りておのおの監視小屋に戻る。予想外の出来事に皆困惑気味だ。パトカーのサイレンが幾重にも重なり、次第に大きくなって現場に到着するのを監視小屋の窓から遠目に眺めていても、なかなか実感が沸かない。しかし、ようやく小屋に到着した田村と流の臭いを嗅ぐと、皆一様に顔を歪め、頷きあった。

事務室の急激に涼しい風が身体に当たり、流の火照った身体と頭を冷やす。途端に、目を覚ました脳ミソがグロテスクな映像と臭いを思い出し、彼は思わず事務室後方のトイレへと駆け込んだ。

便器にしがみつき、流は嘔吐を繰り返した。その背を、田村がごつごつした手でゴリゴリとさする。さっき飲んだばかりのスポーツドリンクも、逆流して便器の中へと落ちていく。胃液しか出てこなくなっても、胸のもやもやは治まらない。流の身体にも田村の身体にも、死臭がこびり付いていたのだ。嘔吐物の酸っぱい臭いでもかき消せないほどに。

「お前にはまだ、見せたくなかった」

田村が呟く。

「十九のお前にあんなもの見せることになるなんて思いもしなかった。まして、ゴミ処理場で」

ぜえぜえと肩で息しながら、流は少し振り向いた。

「田村さんは、初めてじゃないの」

「さあ、何度目かね。密室の中で腐り果てた人間を見たこともある。それが人間の形だったかどうか、生き物であったかさえわからなかったこともある。だけど、あんなに小さく、あんなに脆い身体が炎天下に晒されていたのを見たのは、正直初めてだ。流、これから数日間、お前は喰うのも寝るのもままならないかも知れん。だが、この先もこの仕事を続けるなら、いずれ見ることになった現場だ。その時期が早かったか、遅かったか。それだけの差。便利屋の仕事は、人の死と隣接してるんだ。それはわかって――」

「おい、事情聴取したいってよ」

田村の台詞を、社長の一ノ瀬が遮った。トイレに半分顔を突っ込むと、いつになく神妙な面持ちで、田村においでおいでする。

「出来れば流をって話だが――、無理だろう。田村、お前が代わりに説明してもらえるか」

「ええ、勿論。流より俺のほうが近くまで行きましたから」

「すまんな。それじゃ悪いが、宜しく頼むよ」

背から手を離し、のっそりと立ち上がる田村は、いつもとは違う重々しい表情だ。声をかけようとして、やめた。とてもそんな雰囲気じゃなかった。

事務室のチープな応接セットにドシンと腰を下ろすと、一ノ瀬は向かい側に座った女に田村を紹介した。

「私、警視庁未成年事件担当、岬と申します」

黒い警察手帳を提示して静かに会釈する彼女は、こんな重々しい事件には似つかわしくないほどか細かった。他に数人の背広の刑事が同席していたが、どうやら一番の責任者は彼女らしい。

「第一発見者の方に話を伺いたいのですが、彼でよろしいですか？」

一ノ瀬と、その後ろに立つ田村を交互に見ながら確認する岬に、

「いや、正確には彼じゃない。見つけたのは流という男だが、まだ十九のガキでね。あまりの衝撃に、トイレから出られんのです」

一ノ瀬は半ばあきれ果てたように肩を動かした。

「実際、流は細かいところまで見てはいませんよ。茶色の物体がチラ見出来た程度まで近付いたら、もう腰を抜かしてしまった。不審なビニルに気付いたのは俺だし、ビニルを見に行くように促したのも俺なんだから、第一発見者は俺ということで間違いありません」
ソファーに腰掛けながら、田村ははっきりと答えた。そうなのかと口パクで確認する一ノ瀬に、実はそうなんですよと彼は頷く。
「どっちにしろ、ウチの現場でウチの社員がえらいもんを見つけたことに違いはねえな。――刑事さん、この現場、立ち入りできるようになるまで、どれくらいかかります」
「そうね、この途方もないゴミの山から、手がかりになるものが見つかれば。現場検証するにも、あまりの煩雑さに、頭を抱えるわね。ここの会社は、この処理場の掘り出し作業を一社でやっているの？監視体制はどうなってるのかしら」
「都から認可を貰ってウチの社だけでやってます。ほら、あそこに認可証が」
軽く振り向きながら、一ノ瀬は社長用の事務机の真後ろに高く掲げられた、額縁入りの都の認可証を指差した。確かにそこには、『ゴミ処分場分別作業許可証』の字と、都の認可印がある。この埋立地を独占して処理分別作業をすることを認可されるには、それなりに信頼と実績がいる。つまり、怪しい業者ではないという証拠の品だ。
「まあ、この仕事だけで食ってるわけじゃないが、何とかかんとか早めに切り上げてもらうわけには行きませんか。せっかく掘り返したところも、台風が来たり雨が降ったりしちゃ、やり直しなんですよ。掘り出しかけた金属も、錆付いてしまったら価値が下がる。何とか協力しますから、うまいこと頼みますよ」
両手をこすり合わせてニヤニヤと笑う一ノ瀬。岬はムッとして睨み返した。すかさず田村がフォローに回る。
「監視カメラを設置してますから、不審者がいれば映ってるはずですよ。勿論録画してあります。なんでしたらご覧になったらいかが

ですか。トイレの向かいの物置に監視装置が入ってます。外部モニターは社長席の正面に三つ。普段はそこで監視してるんです。案内します」

立ち上がり、右手で案内しながら去る田村を、一ノ瀬はすまんなと両手で拝んだ。

事務室の奥、小さな通路を挟んで背中合わせのトイレと物置部屋。向かって右の物置の扉を開けようと通路に立つと、田村の耳に流の苦しそうな声が聞こえてきた。トイレのドアが少し開いて、中から嘔吐物独特の臭いが漂ってくる。

岬と、部下の刑事は思わず鼻を手やハンカチで覆った。

「流、お前、まだダメか」

田村の声に反応して、流は重く力の抜けた身体をよいしょと持ち上げ、のらりくらりと立ち上がる。げっそりとやつれた顔でトイレからそっと顔を出し、田村の後ろの刑事たちに軽く会釈した。

「俺、自分では結構、タフだと思ってたんだけどな。気のせいだった。シャワー、浴びてきていい？」

「まあ、いいんでないの？　ね。刑事さん」

流の汚れたつなぎ服から漂うなんともいえない臭いに岬は驚き、何度も頭を上下に振った。ビニルに一番近付いた田村より流の臭いがキツイのは、重機に乗っていたか人力で掘り返したかの差だということを、彼女らはまだ知らない。

トイレの隣の、カーテンで仕切られた更衣室に入っていく流を、岬は怪訝そうに見つめる。

「ねえ、彼、労働条件は大丈夫なの」

「流のですか。ええ、まあ、ちょっと場所が場所だけに他よりしんどいかもしれませんが。大丈夫、保護法には引っかかってませんよ。都から認可受ける際、その辺きつく言われましたからね。個人からの依頼に比べて、この仕事は結構金になる。こんなことで認可証取り消されたら、やってらんないでしょ。それに、養護施設から引き取った人間を無下には扱わないですから、ウチの社長は」

「孤児？」
「あ、ええ。そうです。ああ見えて、社長は人情の厚い人で。社員の何人かは社長の養子になってるんです」
ふうんと鼻で答え、岬は何かをかみ締めるように更衣室のカーテンを見つめる。
「このご時世、珍しくありませんよ。産んだままゴミ処理場に子供を捨てるような親に比べりゃ、赤ちゃんポストや施設にでも預けてくれた方がマシだ。人権とか、尊厳とか、そういう倫理的なもんは、時代が進むにつれてどんどん薄れていってる気がしなくもないですがね」
「――そうね。あの、蛆に埋もれた遺体はきっと、親に抱かれる間もなく捨てられたんだと思うわ。へその緒もそのまま、胎盤と一緒にビニルに放置されたあの子の悲しみは、この世の誰にも理解できるもんじゃない。孤児であっても、誰かに託されたということは一つの命として子供を思う親の心があったに違いないと、思うしかないのかもしれない」
憂いるように斜めに視線を落とした岬は、どこか艶っぽい。黒いスレンダーなスーツの内側に何か悲しい思いを隠し持っているような気がしたが、田村はそこには触れなかった。死臭とゴミと土の混じり合った臭いが占拠する中でも、そう感じてしまうのは職業病だと田村は小さく笑った。

Ｅｐｉｓｏｄｅ０３：事情聴取

目を閉じるとあの物体が眼前に浮かぶ。振り払っても振り払っても、それは消えない。網膜にしっかりと刻み込まれたように流を苦しめる。小さな手には五本の指が見えた。その茶色にただれた腐った皮膚にうごめく白い蛆が、自分の足元まで這って来る。幻影だと知っていつつ、首を振り、足をすくめる。そうすればそれが消えてなくなるのではないかと錯覚するのだ。

シャワーを全身に浴びて、その水と一緒に臭いも記憶も流してしまおうと思っていた自分が如何に浅はかだったか。流は思い知る。そしてうな垂れる。

「流君、着替え置いといたよ」

シャワールームの外で、女の声がした。事務員のなぎさだ。五つ年上の彼女の、いつもと変わらぬ調子に、少し違和感を覚える。

「刑事さん、流君とちょっと話したいんだって。待ってるみたいよ」

シャワーを終え、柔軟材の甘い香りのする作業着に着替えるが、やはり鼻の奥で死臭が存在感を主張した。ボディーシャンプーを泡立てて何度となく洗ったのに、消える気配すらない。これが死臭というものなのか。

このままでは田村の言うとおり、「喰うのも寝るのもままならない」状態になりかねない。「便利屋の仕事は死と隣り合わせ」なことは、十分承知していたつもりだった。全部、「つもり」……。経験不足は否めない。初めてのことだからと言われれば、反論するすべもない。

事務室の奥、社長席には一ノ瀬がいつものバーコード頭をこちらに向けて座っていた。刑事が数人取り囲む中、普段は見せない神妙な面持ちで、監視カメラや作業計画表などを指差し説明しているのが見える。

その手前、応接セットのソファーに先ほどの女刑事がいた。黒い

スーツの細身の女だ。流の姿を確認すると、立ち上がって軽く会釈する。
「流君ね。改めまして、私、警視庁の未成年事件担当の岬です」
話を伺ってもいいかしらと、優しそうに微笑む彼女は、年の頃三十半ばか。大人の色気を感じる。肩までのストレートヘアはまさに流の好みだが、年齢は微妙に許容範囲から外れていた。
流は促されるまま、彼女の向かいの席に座った。まだ生乾きの髪の毛をくしゃくしゃっといじり、どうしたらいいのかと不安そうにしていると、
「思い出したくないだろうけど、少しだけでも教えてもらえるかな」
岬は持っていたバッグからボイスレコーダーを取り出して、そっとテーブルに置いた。
彼女の台詞と態度に、なぜか流はムッとする。一呼吸間を置くように、テーブルに用意されていた麦茶を勢いよく飲み干して頭を冷やした。シャワーで温まった身体に冷たさが気持ちいい。
「話すことなんて殆どないよ。田村さんに聞いたんでしょ。俺がわざわざ喋ることなんてないと思うけど」
自分が思っていたよりも、ぶっきらぼうな台詞に驚いたのは流の方だった。初見の相手に失礼だと思いつつ、口が止まらない。
だが岬は、そんな流には構わず淡々と話を続けた。
「まあ、そう言わずに。一番最初にあの袋に近付いたのは君なんだから、私にそのときの様子を聞かせてよ」
「――あのさ」
氷だけになったグラスを両手で抱えたまま、流はテーブルに肘を付いた。そしてしばらくの無言の後、彼はぐっと体を前に倒して、岬の顔を覗き込んだ。
「刑事さん、なんか俺のこと、子供扱いしてるよね。未成年だから？」
じろじろと岬の様子を伺う流の視線に、彼女ははっとする。流はその、少しだけ反応した岬の顔を確認すると、身体を引き戻した。

「そんなつもりは。ごめんなさい。気を悪くした？」
「いや別に。未成年事件担当なんて言うから、ちょっとからかっただけ。――ちゃんと答えるよ。田村さんに聞いたかもしれないけど、あの付近は三日前に重機で掘り返したばかりのとこ。掘り返して、ガス検知して、異常がなかったら俺が掘り出し作業に入るの。ガス抜きの管が均一に並んでただろ。ゴミから発生するメタンを抜いてるんだけど、そこに番号がふってある。いつも確認して作業してるから間違いないと思うよ」
「それは確かにさっきの彼に聞いたわ。三日前ね」
頷きながら手帳に走り書きのメモをする岬の手元を、流は更にまじまじと見つめる。
「ねえ、刑事さん、独身？」
左手の薬指には指輪がなかった。
「ええそうよ」
「勿体無いね。美人なのに。こんな仕事してるから出会いがないんじゃない？」
よくよく見ると、かなりいい線いってる。年齢なんかで判断するもんじゃないのかもと下心がうずく。そんな流の心を知ってか知らずか、岬は彼を無視するようにひたすらメモを書き進めた。
「大人をからかうんじゃないの。で……、あの場所まで歩いて、何かいつもと違ったことはなかった？　見慣れないものが落ちていたとか、もしくは、なくなっていたとか」
「いや、そういうのは、ちょっと。わかってたら、あの場でとっくに気付いてたよ」
「そう……」
髪を時折かき上げながら、彼女はペンを走らせた。その前かがみになったその襟元から、胸のふくらみが見える。思わず体が反応した。白い大人の肌だ。しかも、ウチの事務のなぎさより胸が大きいなどと、流はどうでもいいことを考えた。ごくりと生唾を飲み、不謹慎な自分を戒めるように、流は別の話題を振ってみた。

「刑事さんの扱う未成年事件ってさ、こんなんばっかなんだ？　変死体、見慣れてたりするの？」
「慣れるとか慣れないとか、そういう問題じゃないでしょ。人が死んでるんだもの。軽々しくそんなこと言っちゃダメよ」
「だけどさ、テレビ見てるとよくやってるよ、虐待死とか、放置死とか。俺みたいなギリギリ未成年ってやつの事件も、担当することあるの？」
「――被害者が未成年なら、ありうるかも。……って、質問攻めね」
ペンを止めて顔を上げた岬の表情が少し緩んだ。流もつられるように照れ笑いした。

陽が落ち始めていた。埋立地の向こう、水平線の先は既に暗くなりかけている。まばらに散った雲に西からの柔らかい光が差し込み、紺と朱の幻想的なグラデーションを作り上げていたが、それに感動できるほど、一ノ瀬の心は穏やかではない。乳児の遺体遺棄事件という、極めて重大な現場に居合わせた流と、その現場を管理していた社長という立場、どちらも一ノ瀬の頭痛の原因だ。なぜここにという疑念と、犯人に対する怒りがこみ上げ、彼は頭を抱えた。
事情聴取と現場検証が終わり、パトカーが引き上げた現場には、ＫＥＥＰ　ＯＵＴの黄色いテープが張り巡らされていた。監視小屋から望む光景の中で一際存在感を主張している。
「社長、どうします。ここの作業は中断するしかないですよね」
呆然として窓から埋立地を眺める一ノ瀬に、なぎさはお疲れ様と冷たい麦茶を差し出しながらたずねた。窓枠に手をかけ、グラスを受け取り、ひと含み。
「そうだな。これから事件がある程度進展するか解決するかまで、この現場での作業は不可能だろう。参ったな。こうなったら、空き家の解体作業でも請け負うか。――すると、流のヤツがろくでもない現場に遭遇する確率が高くなるんだがなァ。いや、参った参った」
一ノ瀬の引きつった笑い顔がガラスに映った。

Ｅｐｉｓｏｄｅ０４：未成年保護法

医療の発達と科学技術の進歩が生み出したのは、人口における世代間のアンバランスだった。高齢化社会、高齢社会を経て、ついに超高齢社会へと突入した日本。労働者一人当たりが支える高齢者の人口は増え続けた。二〇〇八年に開始された後期高齢者医療制度はすぐに崩壊し、加えて少子化には歯止めが掛からず、六〇歳以上の高齢者の人口が初めて総人口の四割を超えるという異常事態が発生した。

労働人口の急激な減少でＧＤＰは右肩下がり、世界経済の中での日本の立場を危うくしていく。技術力とクオリティの高さが売りの日本製品も、海外からの労働力の供給という手段を使ってしか保てない。移住した外国人労働者は国際結婚と多産という形で日本の人口に貢献したが、企業秘密や情報の海外流失、外国人犯罪者の増加など、歪も多く生じた。

地域コミュニティが崩壊を始め、人と人との繋がりが薄れる中、児童虐待・傷害事件、高齢者の孤独死などが問題視されるが、解決の糸口はつかめない。このままでは日本の将来が危ないと考えた政府与党は、野党や世論の厳しい反対意見を無視し、「未成年者を保護し健全な人口増加を目的とする法律」を制定する。俗に言う、「未成年保護法」である。

「二〇歳未満の未成年者に対する性犯罪、虐待、傷害、殺人を行ったものは死刑、または終身刑に処する」の条文の下、警察や自治体は監視を強めた。将来、人口増加に貢献するであろう未成年者を一人でも多く保護し、人口構成の歪をなくそうというのである。

しかし、これらの一見正当と思われる施策には恐ろしい穴がいくつもあった。

まずは、未成年者に対して犯罪行為を行ったものが実の父母である場合もこの法律が適用されること。これにより、保護者を失った

多くの子供たちが孤児として児童養護施設に収容されることとなってしまった。里親制度により施設から旅立つ子供は稀で、殆どの子供が成人するまでの間、養護施設での生活を続けるのだ。税金によってまかなわれる施設の運営は、財政難の日本を逼迫させていくことになる。

加えて終身刑の設立により、刑務所不足の深刻化も浮き彫りになる。二十一世紀初頭に認可された民間刑務所も、収容人数の増加により危機的な経営状態に陥る。民営化により、コストを抑えることが出来る利点はあるが、収容人数の肥大化は最終的に国家予算を圧迫し、更なる財政難の原因となってしまったのだ。

新たな産業や技術開発が進んでも、こうした社会問題は一向に解決の兆しを見せない。暗黒化していく社会情勢は、法律によって保護されたはずの未成年自身にも影を落とした。親の愛情を知らない子供たち、家庭というコミュニティから疎外されていく子供たちの行き着く先が――、無垢な心をもてあそぶ犯罪集団であることは想像に難くない。未成年保護法と少年法により、未成年犯罪者にある程度の加護が成立すると、犯罪集団はますます拍車をかけて未成年者を闇へ引きずり込んでいった。

「未成年保護法」を当初から非難した野党や世論からの反撃を受け、国政は不安定になった。このようにマイナス局面ばかりが際立つ二十一世紀末の日本で唯一元気だといわれるのが、流たちの所属している業界、「便利屋」稼業である。

金属再生工業という新たな産業の影響もさることながら、この歪んだ社会情勢がなにより便利屋という職種を発展させた。隣の住人の顔すら分からない、頼るべき家族や親族がいない――。遺品の整理から掃除、日々の買い物まで、全てが便利屋のよい収入源となる。

一番ありがたいのが、自治体からの廃屋の撤去作業。廃材やゴミのリサイクルを同時に行うことで、更に収入を得られるのだ。

便利屋一ノ瀬も以前はこうした請負を主にこなしていたのだが、一ノ瀬が流を引き取った五年ほど前から方針を転換し、ゴミ処理場

の分別作業に重きを置くようになっていた。
「そういうわけで、しばらくの間は全く手が付けられん。埋立地の仕事は後回しにして、他で稼ぐしかない。インターネットで募集した個人依頼と、自治体から要請のあった廃屋撤去作業で急場をしのごう」
東京郊外にある事務所に社員を集め、一ノ瀬は厳しい表情で一同を見渡した。
「個人依頼はなるべく中堅社員に頼もうか。新人や若い連中はまだ経験が浅く、きめ細やかなサービスが出来るまでにはもう少し経験が必要だ。廃屋撤去の作業にベテラン社員とその他を配置して、資源分別などのノウハウを学んでもらおうと思う」
廃屋撤去――、身体を動かせば気分が晴れるだろうかと、流は溜め息をついた。
事件から三日、結局まともに飯も喰えていない。田村の言うように、吐き気が止まらず、寝ることもままならなかった。今まで考えてもいなかった死の存在に、流はさいなまされた。人はいずれ死ぬ、そんなことは分かっていたが、死というものがあれほどまでに残酷でおぞましいものだとは。
オンボロ社宅の自室で布団を被り塞ぎこんだ流に、田村は何度も見舞いに来た。
「流、怯えてちゃ、あの子に失礼だぞ。あの子はああなりたくてなったんじゃない。あの子を守るべき大人が、義務を放棄したからああなってしまったんだ。手を合わせろ。あの子の気持ちを考えろ。お前が死臭に悩まされるよりもっと辛い思いをして、あの子はこの世を旅立ったんじゃないのか」
ドアの向こうで語りかけた田村の台詞が、幾度となく頭を巡ったが、それでも流は震え怯える自分の心を抑えることが出来なかった。未熟だと思われてもいい。どうしたらこの気持ち悪さがなくなるのか、それしか考えられなくなっていた。
現場の地図を渡され、田村と流は二人でワゴンに乗り込んだ。同

じ現場にあと三人、大型トラックの荷台に重機を乗せて向かっている。

まだ緑が残る昔ながらの町並みを抜けていく。生垣に庭木、庭先の小さな花壇が流の視界をどんどん通り過ぎた。全開にした窓から風が入り込み、流の頭を冷やす。全身に風がいきわたる。気持ちも少しずつ、晴れていく。それでもまだ、あの日の死臭が鼻に残っている気がして、流は腕で何度も鼻先をこすった。

カーブを曲がるたびに、ワゴンの背中で道具がガシャガシャと耳障りな音を立てる。旧世代の壊れかけた二十年物の車体は、アスファルトの微妙な段差にいちいち引っかかって大きく揺れた。スコップにハンマー、防塵マスク、業務用掃除機――、使い込んだそれらは初めて作業に加わる流を歓迎していてかあざ笑ってか、聞いていたラジオの音を容赦なくかき消していく。

『未成年保護法廃止を巡る問題で、与党――は、有……の会合を――、これにより、全国の刑務所に収容された――……』

Ｅｐｉｓｏｄｅ０５：廃屋

高齢者の単身世帯が増加した二〇世紀末から少しずつ問題になってきたのは、孤独死していく老人の遺産整理や廃屋の管理だった。身寄りのない高齢者や遺産放棄するその子供らが増加することで、町には廃墟が溢れた。依頼があれば率先して整理回収に向かう便利屋も、全くそうした気配のない物件には手を付けられない。場合によっては不法侵入や窃盗として扱われてしまうデリケートな問題なだけに、宝の山を指をくわえて見ていなければならない。

遠縁の親戚があれば遺品と遺産をある程度整理して何とか引き取ってもらうことも出来るが、高齢者の一人暮らしにはそれなりの家庭の事情が付いて回り、殆どの場合連絡を取れなかったり、取れても相続拒否されてしまう。そうなってくると、引き取り手のない物件や遺品はそのまま放置され、何年も何十年も人が入らぬお化け屋敷へと変化していく。

こうした物件は、更地にでもしないと買い手が付かないうえに、犯罪の温床となる危険も秘められている。そこで、十年以上持ち主もなく空き家として放置されている建物の所有権を自治体に強制移行する法律が制定された。自治体が元の所有者やその関係者の許可なく、税金でそれらの空き家や空き物件の撤去作業を行うことが出来るようになったのである。作業依頼の殆どは建設会社や便利屋に寄せられる。競争入札になることもある。それほどに魅力的な収入源の一つなのだ。

便利屋一ノ瀬のロゴマークの入ったポンコツの白ワゴンが現場に到着したのは、昼の少し前だった。築何十年かのボロアパート、住む者もなく大家も亡くなり、放置状態が続いていたらしい。以前は美しい白壁だったと思われるところにはツタの葉が生い茂り、窓やドアのギリギリまでかぶさって入り口を塞ぎかけている。庭木や花壇には雑草で覆われ、様々なゴミが散乱しているのが遠くからも見

えた。しかも二階へ続く階段は手摺りが朽ちて落ちているではないか。
「流、どうした。怖気づいたか」
ワゴンの助手席から顔を出し、アパートを仰ぎ見て、流は唾を飲んだ。
そんな彼を見て運転席の田村は隣で嫌みったらしく笑う。
「こんなの、ゴミ処分場でやってきた俺にしたら、全然大した事ねぇよ。ちょちょいとやっちまおうぜ」
流は思わず必要以上に強がって見せた。
「まあ、そう思っていられるのも今のうちさ。さて準備をと言いたいところだが、区の担当者が来て、正式な許可を貰ってからじゃないと作業に移れないんだ。江川さんはまだかな」
田村はワゴンから降りずに、周辺を何度も見渡した。
数分後、トラックに乗った仲間の三人が到着、ワゴンの後ろに停まった。先輩の川岸、流の二つ上の康司(こうじ)、そして事務員のなぎさだ。田村は振り向いてまだまだと手で合図し、更に江川を待った。
約束の時間から十分ほど送れて、正面から区の軽乗用車が現れた。敷地の向かいに車を停め、区の作業着を来た眼鏡の痩せぎす男が慌てたように運転席から飛び出した。
「あ、江川さん、待ってましたよ」
田村が運転席から手を振ったのを見つけて、江川はペコペコと何度も頭を垂れた。
「いやぁ、一ノ瀬の田村さん。お待たせしました。ちょっと取り込んでまして」
後頭部を掻きながら、やたらと腰の低い五〇代の男が近付いてくる。へらへらした笑顔に、なんだか流はイラッとしてしまう。
「おい、出るぞ」
田村がぽんと背中を叩いた。
ワゴンを出て、江川を先頭に敷地内に入る。二メートル近い塀でグルッと三方向を囲まれた敷地内に、そのアパートは立っていた。

その塀自体も、ところどころ壊れて崩れ落ち、圧迫感がある。夏の暑さと雨でぐんぐん伸びた雑草は膝丈まで迫り、ゴム長でも歩きにくい始末。蚊だろうか、ぶんぶんと耳元で羽音がした。

「電気も水道も止まってから、十数年経ってます。ゴミの投げ捨てが酷くてね、近所の人から苦情が最近特に増えてしまったんですよ。最終的にはここを更地にしてもらいたいわけで。もちろん、廃材リサイクルなどで得た収入は一ノ瀬さんのとこの取り分ということで構いませんよ。はい、これ、今回の作業許可証です」

ここが水道管、ここがガス管の場所ですよと、当時の登記簿の写しを見せながら、江川は相変わらずのニヤニヤ顔で説明した。時折ハンカチで汗を拭き拭き、

「いやぁ、こんな暑いのに、ホント、お疲れ様です。便利屋さんほど忙しい仕事はありませんね」

などと、思ってもいないような台詞を口走る。

はいはいと頷く田村も、どうやらこのいけ好かない男が嫌いらしい。最初こそ笑顔で応対していたが、そのうち表情が消え、惰性で相手をするようになっていた。

「まあ、そういうわけで。私は失礼します。作業が完了したら区までご一報願いますよ」

最後に深々と一礼し、走るように去っていく江川の後姿を見て、皆一様に溜め息をついた。区の軽自動車がいなくなるのを確認すると、田村は皆を集めて円陣を組んだ。

「さて、社交辞令が終わったところで、作業に移るぞ。作業に数日掛かるのは間違いない。まず、庭の草むしり、それから庭木を引っこ抜く。外にあるゴミを分別処理して、その後室内のゴミ撤去、解体、資材の区分け、持ち出し……と、慣れないヤツもいるから、みんな手伝ってくれよな」

田村はそう言って、流の方を向く。それは俺のことかと流は大きく眼を見開いた。当たり前だろうという視線が皆から注がれ、流は思わず萎縮した。

「なぎさは？　いつも事務ばっかりしてんじゃん？」
事務のなぎさがメンバーにいるのを、流は当初から不審がっていた。
「お前が知らないだけで、なぎさは現場経験者だよ。力仕事は無理だけど、廃材分別はプロだからな。それで呼んだんだ。なぎさ、流のこと、頼むぞ」
「はい、任されました。流君、よろしくね」
童顔のなぎさが　にこりと笑う。いつもの事務服じゃない、自分と揃いのつなぎを着たなぎさは、なんだか妙に色っぽく見えた。長い髪の毛を後ろにきゅっと束ね、きっちり締めたつなぎのボタン、普段は見えないスレンダーな体のラインが見えるあたり、なかなかツボだ。
「あ、今、いやらしいこと考えてたでしょ」
小声で、だがみんなに聞こえるように、なぎさは流の隣で囁いた。
田村の咳払い、赤くなる流。
「さて、日没まで、とりあえずこの敷地内をきれいにしよう。明日から順次建物の取り壊し作業に入れるようにな」
田村がパンパンと手を打ったのを合図に、五人は一斉に作業を始めた。
草刈機で年長の田村と川岸が背丈の高い草を刈り、流となぎさと康司はその後始末や庭に散乱するゴミの処分に追われた。空き缶、空き瓶、弁当や菓子の空箱、ポルノ雑誌から家電、自転車まで……ありとあらゆるゴミがあった。カビ生えた布団や座布団、衣類など、擦り切れどうしようもないものまで置いてあるところを見ると、ゴミがゴミを呼んでしまったと思わざるを得ない。しかも敷地の奥に行けば行くほどうずたかく積まれている。いわばそれは、
「ゴミ屋敷だな」
流が呟いた。あのゴミ処理場とはまた違う種類の臭いがした。ぶんぶんと舞う蝿や蚊も、きちんと防虫剤の撒かれた埋立地とは違う。手で払っても払っても追いかけてくるのに業を煮やして、全身を震

ったが、何の意味もない。そうするたびに、「ちゃんと仕事しろよ」と田村の小言が聞こえてくる。
なぎさの指示で可燃ごみ、資源ごみなどに区分けし、それぞれ種類ごとにユンボを降ろしたトラックに載せていった。木の板で仕切り、分かりやすくすることで受け入れ業者も作業がしやすくなり、その分査定額が上がるのだという。
「まあ、文句言わないで頑張ろうよ。ここが更地になったら気持ちいいよ。ま、その土地代はうちらには入らず、区の資産になるんだけどさ。ホラ、少しずつ土が見えてきたよ。流君、ファイトファイト」
昼食をはさみ、更に作業は続く。入り口からどんどんと進められた作業は、ついに敷地の一番奥、アパートの陰まで進んだ。そして多い茂ったツルやツタが建物のドアから剥ぎ取られた頃には、日がどっぷりと暮れ、澄んだ夜空に月が見え始めていた。
「さて、本格的な作業は明日からだ。今日はお疲れ様。明日は、今日出た廃材を工場に持ち込むところから始めよう」
トラックとユンボに鍵を掛け、荷を降ろして軽くなった軽ワゴンで家路に着く。
車内で田村と川岸が明日の作業について前の席でなにやら話し合っていたが、流には聞こえなかった。
「流君、寝ちゃったね」
定員オーバーの車内、なぎさの膝の上に覆いかぶさるようにして、流は夢の中に入っていた。彼女が優しく髪を撫ぜる感覚すら、流には届いていなかった。
「まだ、ガキだな」と言う康司も、少しうとうとしていた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ０６：リサイクルセンター

朝日が冷たい秋空を割くように眩い光を放ちながら昇ってくる頃、総合リサイクルセンターはもう動き始めていた。関東一円のリサイクル品を一手に引き受けるその場所は山間にあった。金属から木材、食品まで、リサイクルにまわせるものはなんでも回収する、取次ぎ所である。政府から認可された専門の業者が駐在し、それぞれの物品をそれぞれの加工工場へと運び出している。

便利屋たちが各地から拾い集めてくる廃材もやはりこの場所に集められ、次々に新しい資源として世に送り出されていく。

康司の運転するトラックがゲートに来ると、監視室からアナウンスで、「積荷確認、進行」の合図があった。ゲートを潜り抜けて更に車を進めると、数人の社員が車を誘導するために前に出てくる。

「積荷よーし、更に前へ」

車の後方から指示があり、更に進む。壁に大きく『０（ゼロ）』と書かれたとてつもなく大きな濃い緑色の小屋が、大きな口をあけてトラックを飲み込んだ。

内部は思ったより明るい。フォークリフトやユンボがあちこちで作業し、景気よい声が飛びかっている。天井から釣り下がった看板に、『木材』『アルミ』『鉄』『基盤類』『エンジン』などの文字が垂れ下がり、その下にはそれぞれの資源が山になって積んであった。

トラックは『一次受付』の真下に誘導され、停まる。

「でけーな」

助手席でただあんぐりと口をあける流を、康司は鼻で笑った。

「こんなん、しょっちゅう見てれば慣れるよ。こんだけ広くても、俺ら便利屋や建設業者が廃材持込みで入れるのはここまでだからな。あとは、専門業者がそれぞれ持ち込んだ廃材の量や質をみて査定してくれるのさ。査定表が揃ったらそれで終わり。支払いは登録して

ある口座に一括振込みってわけ。俺らが現金もって歩けるわけじゃないんだよ、防犯上」
「ふーん、なるほどね」
二つ上とはいえ、康司は何でも知っているようにさえ思えた。
二十歳を超えれば出来る仕事が増えるよと、いつだったかなぎさが言っていたのを思い出す。それを裏付けるように、二つ上の二十一歳の康司は流に出来ない仕事をたくさん知っている。正直羨ましい。年齢と経験で仕事を振り分けるのが雇い主の一ノ瀬の信条らしく、逆らうことが出来ないと知っていても、ほんの二歳の隔たりで何もかも違うように思えていた。
受付カウンターから一人の男が、流たちのトラックに足早に近付いてくる。他の作業員とは違う、赤い帽子の男だ。
康司は窓から身体を半分出して手を振った。
「お、綱淵さん、おはよう」
「よう、康ちゃん。久しぶり。今日はいつもとは違う荷物みたいだな」
綱淵と呼ばれた中年男は、運転席のすぐそこまで来て、運ばれていく資源ゴミを見ながらそう言った。
「――それに、いつもと違うあんちゃんがいる」
流は今気付いたような振りをして姿勢を正すと、運転席の窓から顔だけ見せた綱淵に軽く頭を下げた。綱淵は随分人のよさそうな、小柄なおじさんだ。こちらににんまりと笑いかけるので、思わず流もにたっと笑った。
「それはそうと、康ちゃん、一ノ瀬の現場で事件があったんだって？　大変だな。積荷が違うのは、そういうのも関係してるのか」
「そうそう。お陰で今はあそこも警察の監視下だよ」
「犯人はまだか」
「あれは……無理じゃないかな。まだ時間が掛かる。手がかりが少なすぎるし」
「酷い話だな。産んですぐ捨てるなんて、母親のすることじゃねぇ。

誰が一体、あんなことを」
事件に話題が触れると、流の機嫌が悪くなる。昨晩久しぶりにぐっすり眠れたのに、また思い出すようなこと言うなんて。康司はデリカシーに欠ける。
顔を背けてむすっとしていると、綱淵は気を使ってか、急に話題を変えた。
「――雑談はここまでにして、康ちゃん、ちょっといいか。そこの若いのも、耳を貸してくれ」
綱淵の声のトーンが一気に下がった。辺りを見回し、周囲に誰もいないことを確認して、綱淵は二人にだけ聞こえるような声でひそひそ話を始める。
「実は最近、廃材泥棒が出るんだ。これだけ人がいる集荷場も、夜中はひっそりとしてる。監視体制が脆弱ってわけでもない。監視カメラはきちんと付いてるし、警備会社に警備も頼んである。それでも盗まれるんだ。金属価格の高騰も原因なんだろうが、ここから盗んで、どこに売るんだと思う？　他に関東近辺でごっそり買い取ってくれるところは他にないんだぜ。他の地域のセンターにも、ここから情報が行ってるから、持ち込めばすぐに分かると思うんだが、情報がない。康ちゃんやあんちゃんなら、盗んだ廃材、なんに使う？」
突拍子もない話に、流も康司もすぐには反応できなかった。
「金属って……、なぁ」
「別に使い道なんか」
「もしかして、海外に売り飛ばす、とか」流が言うと、
「そういうのは税関で引っかかるんだよ」康司が遮る。
「情報があったらでいいんだ。便利屋は顔が広いから、どこかで話を聞いたら教えてくれないか。実は、報道発表はこれからでな。もうすぐニュースで流れるだろうが、この時間はまだどこにも出てない情報なんだよ。とりあえず、覚えといてくれるか――っと、査定が終了したみたいだな」

綱淵のところに、伝票を持った別の人間が走ってきた。届いた伝票を見て、康司に渡す。
伝票を受け取り、さっと眺めると、康司は車のエンジンをかけた。
「埋立地に比べてどうかって言われると、トントンかそれ以下ってとこか。まあまあだな。ありがとう、後で社長にも話しておくよ」

「その話なら、さっきニュースでやってたぞ」
リサイクルセンターから事務所に戻った流と康司に、一ノ瀬が言った。朝七時台のトップニュースだったらしい。壁に掛けられた少し大きめのテレビ画面では、そのニュース番組がまだ続いていた。
「最近、意味の分からん事件がどんどん増えてる。これもその一つだな」
淹れたてのコーヒーの香りが、朝の爽やかな光の差し込む事務室に充満する。応接セットのソファに座った流たちにも、同じコーヒーが運ばれてきた。
「世の中が不安定ってことよね、それだけ」
作業着のなぎさが朝の運搬をねぎらって、一ノ瀬には出さなかったカステラを一緒に差し出した。ちょっとした気遣いが、なんだか嬉しい。流は一目散にカステラを頬張った。
「ニュースによると、狙われているのは金属廃材だけではないな。廃車、中古車、燃料、なんでもござれだ。金にするにしても、すぐに足がつく世の中だし、『なんに使う』か尋ねた綱淵のダンナの気持ちもわからないではない。何か、よからぬことが起きなきゃいいがなぁ」
社長席で足を組み背もたれに身体を任せながら、一ノ瀬は少しずつ、コーヒーを啜った。
つけっぱなしのテレビ画面、沈黙の隙間に割り込んで更なるニュースが聞こえてくる。
『……未明から明け方にかけ、――区の住宅地で騒音が鳴り響き、辺りは一時騒然と――……。一部で、黒い大きな影を見たという証

言もあり、警察は原因を――』
「ほらまた、変な事件ばっかりだ」と一ノ瀬。
「乳児の遺体遺棄、廃材の盗難、変な騒音騒ぎ。世の中どんどん変な方向に向いてるな。そのうち、真っ当な大人が自分だけになっちまうんじゃないかなんて思うこともあるさね。いやあ本当に、いやな世の中だよ」
「……ちょっと待って。なんで社長『だけ』なわけ？　俺や康司だって、ここにいるなぎさだって、みんな真っ当だよ」
口からカステラをはみ出させながら、流は離れた社長席の一ノ瀬に喰らいついた。
「馬鹿だなァ、冗談、冗談だろ。あくまでも例えだよ。そんな言葉尻にいちいち噛み付いてたんじゃ、まともな大人にゃなれんぞ、流」
がははと、一ノ瀬は大声でからかった。
流は赤面し、悔しそうに熱いコーヒーを喉に流し込んだ。

Ｅｐｉｓｏｄｅ０７：形跡

「廃屋撤去は危険を伴い、精神的にも肉体的にも大変な作業だ」なんて、幾ら言われても実際作業に入るまでは信じることが出来なかった。ゴミの山を掘り返すほうが何倍も大変だという思い込みは、作業を進める間に徐々に削がれた。

生活観がのしかかってくる。住人が消えた日から止まったまま何年もなりを潜めていた時間が、撤去作業と共に少しずつ動き出していくのだ。色あせたカレンダー、カーテンや畳、壁の染み、食器や衣類まで、住人の残した思い出があちらこちらに見え隠れする。リサイクルしようにも出来ないたくさんのゴミが新たに発生していく。

一号室から十号室まで、四と九を飛ばした全八室、一号室から順に荷物を運び出す。流となぎさがごみを分別し、それを康司と川岸がトラックに運び、田村が種類ごとに分けて荷台に積みあげる。

地道な作業、思ったよりも作業が進まない。涼しい風が入り込んでくるものの、ほこりが舞い、マスクとゴーグル無しでは作業できない室内で、もくもくと作業を続けるのはただでさえ根気が要る。それだのに流の手は、数分前から止まったままだ。

「流君、文字は読んじゃダメだよ」

なぎさが言う。

流ははっとして、日記帳らしきものから手を離した。ミミズののたくったような老人の字で、毎日の食事が記してあった。ページを進めるにつれどんどん貧しくなっていく食事と、少なくなっていく文字数に、流は記憶の中の何かを重ねていた。

「誰かの記憶の中に入り込んだら、抜け出せなくなる。割り切って考えるしかないんだよ。これはあくまでもゴミ、所有者のないゴミなんだって。誰か必要としている人がいたら、今までこんな風に放置されてるわけないじゃん。このまま放置され続けるより、私たちがきちんと分別してリサイクルに繋げてあげる方が、よっぽど幸せ

だと思うよ。――はい、分かったら、仕事仕事」
「……結構、非情なんだな、なぎさは」
流は目を潤わせて、作業を続けるなぎさを感心したように眺めた。
「あのね、流君、手は止めないの。作業が滞っちゃうじゃない。それに私が非情なんじゃなくて、この世の中が非情なのよ。自分の親も兄弟も、どこでどう生きようが死のうが関係ないって思ってる人、増えてるよね。ま、うちの親も流君の親も、今は刑務所だし。お互いどんな生活をしてるかなんて考えたこともないわけだけど。希薄なんだよ、それほど。人間関係ってやつが。分かる？」
「う、うん……まぁ、分かるっちゃ分かるけどさ」
「分かったら、仕事ってさっきから言ってるじゃない。まだ二号室だよ。あと六部屋あるんだからね。私たちの作業が遅くなったら、その分康司君や川岸さん、田村さんの仕事にも響くんだよ。ちゃんとやろうよ」
なぎさの真剣な瞳に圧倒され、流は渋々と作業を始める。棚の中、賞味期限のとうに切れた缶詰、しなびた菓子、妙に小奇麗な茶道具……。確かに『誰かが生活していた』跡がくっきり残っている。
彼女の言うように、『人間関係が希薄』なんだ。だからこそ、こうやって、どこにも行き場のない思い出が蓄積されていく。何もそれは、ここの住人たちだけに言えることじゃない。自分自身も、血の繋がりを断ち切るようにここにいる。一ノ瀬に引き取られたときから、自分は今までとは違う人生を歩めると、親とは係わり合いになることは金輪際ないと、そう信じていた自分を思い出した。
流が一ノ瀬に引き取られたのは、五年前の春のこと。初めはなかなか懐けなかった。いけ好かないオヤジだと今でも思う。それでも一緒に過ごしてこられたのは、子供のいない一ノ瀬夫妻が本当の子供のように、自分や自分と同じように養子にとられた孤児たちと接してくれるからに違いない。なぎさもその一人。児童虐待が原因で刑務所に入れられた両親と離れ、施設で暮らしていた二人は、一ノ瀬と出会い、引き取られたことで一人前の人間になるための道を開

いてもらったと今でも思っている。
ぶっきらぼうで心地いい愛情を注ぐ一ノ瀬と、記憶の中の本当の両親があまりにも違いすぎて、どこまでが現実でどこからが虚構なのかさえ分からなくなるほど――、充実していた。
まだ幼かった時分、言葉に出来ないほどの悲しみと貧しさがあったことだって、こうして誰のものとも分からぬ日記を読むまで、思い出せやしなかったのに。『精神的にも肉体的にも大変な作業』と言って、一ノ瀬や田村が作業をさせたがらなかったのが、今になって分かる気がする。
「あ、また。手が止まってる。ダメだよ、流君」
またもなぎさの声に気付かされ、流は慌てて身体を動かした。
「いつもの流君らしくない。こんな作業くらいで参ってたら、これからもっとヤバイ物件行かなきゃいけなくなったとき、どうすんの」
ダンボールに瀬戸物を片付けながらなぎさが言う。
「ここはいいよ。人が完全にいなくなってから十年近く経ってる。人の気配もすっかり消えて、モノだけが残ってる状態だから。これがさ、『昨日死体が見つかりました。死後一週間です。腐ってます。蛆や臭いが酷いけど苦情が多いので、何とかしてくれませんか』って依頼もあるんだから」
「ま、マジか」
「そういうのを何とかしてるのがベテランの田村さん、中堅の川岸さん辺りだよ。あの二人には足向けて寝られないんだから」
「――そういえば、田村さんが言ってたな。『密室の中で腐り果てた人間を見たことがある』って」
「そゆこと。だから、こんなところでつまづいてちゃダメ……と、川岸さん。どしたの」
二号室の入り口で、川岸が汗だくになってこちらを見ていた。
小柄な川岸は、被っていた帽子を脱いで頭を何度もタオルで拭い、持ってきていたペットボトルをがぶ飲みしながら、流となぎさの会話を立ち聞きしていたのだった。

「いや～、仲がよろしいな、ご両人」
「川岸さん、冗談はいいよ。あれ、もしかして、休憩時間だった？」
なぎさもようやく手を止め、ゆっくりと立ち上がった。ひざの上のほこりを払い、ゴーグルを外して汗をそっとふき取りながら、川岸の方へ歩いていく。
「まだ時間には早いけどな。ちょっと休憩。――事情が変わったんだよ」
「事情って何？」
奥で作業していた流も、川岸の台詞に触発されて作業をやめた。
「区の江川さんの話では、ここは随分長居間空き家で権利者もいなくなったからって話だったが、どうやらちょっと前まで人がいたらしい。もしかしたら、今も出入りしているかもしれないんだ」
まあ来いよと、川岸は二人を屋外に誘った。半信半疑のまま、流となぎさは川岸の後ろについて歩いた。
塀と建物に挟まれた五号室裏、大人一人がようやく通れるその場所に、田村の大きな体が屈んでいた。昨日の草刈ですっきりしているとはいえ、かなり窮屈そうだ。
「何してんの、田村さん」
流の声に、田村は大きな身体をのっそりと持ち上げた。
「みんな、来たのか。すまんな」
田村の陰から、康司の姿も見えた。どうやら二人で何かを覗いていたらしい。
「実はな、この建物から隣の敷地に配線が繋がっているようなんだ。電柱から盗ってるのか、それとも隣家から盗んでいるのか。とにかくこの建物の中で、電気やガスが止まった後も誰かが長期間住んでいたような、そんな形跡が三号室と五号室にある。ここを見てくれ」
田村は足元の塀に空いた小さな穴を指差した。太く黒い線がアパートの壁を突き破り、地面を伝って塀の穴から外に続いていた。
「昨日、草刈作業が終わった夕方は、ここも暗くて気付かなかったんだがな。さっき、荷出し作業が遅いから先に三号室を見ておこう

と康司と川岸と一緒に部屋に入ったときに、パソコンが数台、しかも最近の機種が置いてあるのを見つけたんだ」
「え、それってつまり」
頭の悪い流にだって、簡単に理解できる。
「そう。何者かがこの建物を使って、何かをしていたということだ。作業は中断だ。とりあえず、社に戻って社長に知らせよう。もしかしたら、また警察沙汰になっちまうかもしれないからな……」

Ｅｐｉｓｏｄｅ０８：被害者

薄く延びたいわし雲が空全体を覆っていた。暮れかけた日が空全体を赤紫に染めてゆく。冷たく渇いた風が、色付き始めた街路樹を大きく揺さぶって葉を揺らした。夕暮れ時になって、更に気温が下がってくる。本格的な秋がもう、すぐそばまで来ているのだ。

便利屋一ノ瀬の社屋まで、五人はワゴンとトラックに分乗して向かった。本来なら、日が沈むギリギリまで作業をしているはずなのに、予想外の出来事があって作業中断。全身筋肉痛の流にとっては、少しありがたかった。

連日の作業でぐったりと疲れ果て、なぎさは後部座席で寝息を立てている。助手席の流も、少しうとうとし始めた。

「おい流、なぎさに聞いたぞ。作業が殆ど進まなかったそうじゃないか。何か考え込んでいたようだったって。まさか、あの遺体のことを未だ引きずっているんじゃないだろうな」

十分ほど車を走らせた辺りで、田村が切り出した。

「いや、それもあるけど」

流は目をこすりながら、車窓に肘突いて窓越しに流れる景色をじっと眺め、答えた。

「俺の知らない、誰かの思い出とか、そこにあったはずの人生だとか、そういうものが頭を巡るんだよな。なぎさは『割り切って考えろ』だなんて言ってたけど、俺、そういうことできるほどまだ器用じゃない。普段は全然考えたりしないのに、あの場所にいると目の前に見える気がするんだよ。あの部屋の持ち主がさ」

「同じように、ゴミ処理場で死んでいたあの子にも、人生があるはずだった」

さらりと言ってのけた田村の一言が、流の心を串刺しにする。また例の映像が流の脳裏に浮かび、彼は思わずぎゅっと目を閉じた。

「いくら時代が進んでも、人は母親の身体から産まれ、いずれ死ぬ。

それは変わらない。愛情の有無に関わらず、生まれた子供には生きる権利があるし、死ぬまで幸せに生きる権利があるはずだ。だのに処理場のあの子は、生まれたままの姿で放置されて死に、あのアパートの住人は遺品を引き取る親族もなくどこかで死んだ。世の中、無常なもんさ。それでいて、幸せなヤツはどこまでも幸せで、こんな荒んだ世界が広がってるだなんて知りもしない。――流、お前、自分が一番不幸だなんて思うなよ？」

「な、なんだよいきなり」

「お前の親が刑務所にいることは、社長から聞いた。なぎさの親もそうらしいな。どんな過去を背負っているか、俺は知らん。だけど、自分だけが不幸だなんて絶対思うな。世の中には、自分より酷い境遇、酷い環境で生きてるやつがごまんといる。下を見ればキリがないが、上を見てもキリがない。人生てヤツは、それほど不条理なもんなんだ」

視界の先にある商店街には、少しずつネオンが光り始めていた。薄暗い景色の中で幻想のように漂う赤や黄、青などの光の粒は、交錯する車のテールライトやヘッドライトと混じって、よりいっそう美しく光り輝いていく。立ち並ぶ高層ビルの窓の明かりは光の波を作り出し、その起伏の合間をいくつもの光の粒が駆け抜けた。

「俺も、若いときは自分が一番不幸だと思っていた。今のお前か、それ以下か。――経験を積めば、人間は変われる。お前もいつかきっと、今、自分の目の前で起こっていることが自分自身を作り上げていくんだと実感する日が来るさ。その日まで、辛抱するんだな」

田村の話は、どこか哲学的で、曖昧だ。決して話の核心には触れず、ただ自分の心にある想いを漠然と伝えているようにさえ思う。それでも、その日の流にはなぜか響き、黄昏に浮き出る夜景とともに心の奥底まで染み込んだ。

車は郊外の住宅地を抜け、商店や事務所の立ち並ぶ賑やかな通りに出た。眩しいくらいにチカチカと光るネオンや街灯、昔から変わりないせわしなく走る車の群れが目の前に現れると、それまでノス

タルジックな気分に浸っていた流もシャッキリと目が冴えた。夕闇とは関係なくガンガン響く音楽に、暴力的なまでに降り注いでくる光の嵐。一気に現実に引き戻されていく。

どこもかしこも、人、人、人。道行く人、店で買い物する人、立ち止まり話し込む人。サラリーマン、ＯＬ、学生……。窓を閉めていても、それらの人の話し声が全て聞こえてきそうだ。

通りの中央にはビルの壁面を使った巨大ビジョン。ニュースやバラエティ番組の画面が幾重にも重なり、空の上にテレビが浮いているようにさえ見える。

「ここはいつでもデリカシーがないな」

田村は言って溜め息をつき、左にハンドルを切った。

その直後、それまでの道に大きな黒い影が覆い被さり、何かが通り過ぎていったのを、流も田村も気付かずにいた。

事務所に到着する頃になると、すっかり暗くなっていた。商店街と住宅地の間、ネオンの届かない郊外の事務所の明かりは、その近辺では一番明るく見えた。ＬＥＤライトになり損ねた電柱のパチパチした明かりの下を通り、事務所の駐車場にワゴンが入ると、待ってましたとばかりに先に到着していた康司が一階の窓から手を振った。

「おい、流！　刑事さんが来てるぞ！」

刑事さん、と聞いても、流はピンとこなかった。

「岬刑事のことじゃないのか。あの事件のときにいた、美人の刑事だよ」

田村に言われ、ようやく思い出す。流は慌ててワゴンから降りると、事務所に駆け込んだ。

道具や書類が無造作に置かれた事務所の奥、応接セットに座った女の後姿が見えた。あの真っ直ぐなストレートの髪は、よく覚えている。

流と、眠気眼をこすりこすりするなぎさを抱えた田村が事務所に

入ると、
「おう、ようやく来たな。流、田村も、まず座れ」
一ノ瀬がいつになく真剣な顔で二人を呼んだ。なぎさを事務室隣の休憩室の畳に寝せ、流と田村は渋々奥まで進んだ。一ノ瀬の合図の通り、岬の前へと腰掛ける。
彼女は最初にこやかな顔で挨拶したが、すぐに表情を凍らせた。
「実は、あの日あなたたちが見たあの乳児遺体の母親が見つかったの」
思ってもみなかった台詞に、流と田村は互いに顔を見合わせた。それは、よかったのか、それとも悪かったのか、どう反応したらよいのかさえ分からない。ただごくりと唾を飲み込むのが精一杯。
「しかも、遺体でね」
――わっと、流が大声を上げた。思わず身体全体を仰け反らせた。
田村も口を開けたまま、目玉を右往左往させている。
「ど、どういうことですか。母親は、自殺した……」と、田村。
「いいえ。他殺よ。しかも、バラバラ遺体で発見。夜のニュースでこれから流れるはずだわ。発見場所は金属ゴミの集積場、廃車置場。三箇所に分散して、今朝方から昼にかけて発見されてる。どれも、一ノ瀬の現場の事件や総合リサイクルセンターでの資源ゴミ盗難事件を受けて独自調査を行ったところ、発見されたらしいわ。――それから」
岬は小さな応接テーブルに広げられた写真の一つを指差した。
「これ、見て。遺体発見現場付近の監視映像よ。この、黒いの、なにかしら」
ゴミ処分場の均等に並んだガス抜き管と、その下に広がるゴミの大地、その中に小さく見える白いものが件のレジ袋であろう。その、真上。夕闇に不自然に浮き上がった更なる黒。ピントが合わず、ぼんやりと霞んでいる。
雨雲のような、それでいて、無機質な黒い影は、連続写真の数枚にだけうっすらと写っていた。

「なんだろう」
「なんですかね」
写真をじっと除きこむ二人の後ろで、一ノ瀬が腕組みをしながら、
「刑事さん、こりゃ、うちらの手に負えませんよ。少なくても長い経験上、こんな変な物体は見たことがない。監視カメラの映像だから、全体像も映っとらんし。画像分析の専門家にでも頼んだ方が早いかもしれませんよ。――で、その母親と思しき女性の身元は判明してるんで？」
「いえ。それがね。手がかりになるものがないのよ。全裸で、顔も判別できない。歯の治療痕で見つかるかどうか。今、捜索願のリストと照らし合わせてるところよ」
「しかし、母親まで殺されたとなるとなァ。あの赤子も報われんなァ」
薄い頭をぼりぼりと掻く一ノ瀬の後ろから、つけっぱなしのニュースの音がする。写真とにらめっこしながら、溜め息を何度もする流。二人の会話と、テレビの音声が頭の中で交互に響く。
もやもやする。あの、報われない小さな手のひらを思い出せば、岬の淡々と語る事実にどうしようもなく怒りがこみ上げてくる。怒りというより、それは憤りなのか。田村が車で言った「幸せになる権利」だなんて、そこにはあったのか。
『ここで、臨時ニュースです』
テレビ画面で、緊急を知らせるチャイムが鳴る。それまでの経済ニュースから突然画面が切り替わり、見慣れた繁華街が映し出された。
『今日午後六時半頃、――区の繁華街に何者かが侵入、通りに面した商店数軒がなぎ倒され、通行人と、自動車数台が巻き添えになりました。けが人のはっきりした人数はわかっていません。目撃者の話では、黒い影が通り過ぎ、気が付くと全てなぎ倒されていたということです。警察と消防は……』
「あれ、さっき通ったとこだ」

「そうだな。丁度、俺たちが通った後だ」
壁掛けのテレビ画面に釘付けになった。惨劇の始終が生々しく報じられ、画面のあちこちに赤い血と赤いランプが見え隠れした。
「黒い……影って、言ってたよ」
「だ、なァ」
「ま、まさかな……」
写真を握り締め、流はぐっと唾を飲み込んだ。

Ｅｐｉｓｏｄｅ０９：三号室

「遺体はバラバラに切断されており、打撲痕が残っていた。性別は確認できたが、身元は不明……。ＤＮＡ分析の結果、先週埋め立てゴミ処分場で発見された乳児の母親であることが判明した。――これかァ。悲惨だな」

社長机に広げた新聞記事を読み上げ、一ノ瀬は大きく溜め息をついた。

岬刑事が昨晩説明に来たとおり、かの赤子の母親が遺体で発見されたニュースが社会面の角に書いてある。ネットやテレビ、ラジオのニュースでは散々報じられていたが、紙媒体でない限り信憑性が薄いなどと、わけのわからぬ論理で半信半疑だった一ノ瀬も、ようやくそれが事実であると確信した。

「母親が殺されたとなると、あの子を放置したのは彼女じゃないかもしれないですね」

事務机でパンをかじりながら田村が言う。

「だな。すると、父親の方か。子供も女も要らない。だからゴミに捨てるのか。理解、出来んなァ」

不妊症で養子をとることを選択した一ノ瀬にとって、それは信じがたい憶測だった。

「欲しくても手に入らないものがある人、要らんのに出来てしまう人。――せめて、赤ちゃんポストに入れてやればよかったのに。そしたら、あんなところで干からびずにちゃんと欲しい人に貰われたかも知れんのになァ」

二〇〇七年、熊本の慈恵病院から始まったこの制度は、論議の末定着した。相次ぐ児童虐待事件、遺棄致死事件。特に、望まない妊娠をした上妊婦検診せずに自宅出産して遺棄という最悪なケースが相次いだため、政府は制度として「赤ちゃんポスト」を認めざるを得なくなった。未成年保護法が制定されると、その存在は更に重要

視される。
倫理問題は議論され続けた。人権団体からの抗議も耐えない。それでも、二十一世紀後半には全国百箇所以上に設置され、年間千人以上の乳児が保護されている。
経済的要因からか、それともレイプや近親相姦など望まない妊娠が原因か。問題を抱えた家庭での育児は虐待や殺害に至る可能性を秘めるため、ポストの有効性を唱える声もある。一方で、育児放棄、安易な性交渉と出産の増加を危惧する声も。それでも、小さな命を守るこの方法は世間に受け入れられていった。
「そんでもって、新聞一面は昨日の『黒い影』騒ぎか。どうなっちまうんだ、日本は」
ずずずっと、一ノ瀬は冷えかけたコーヒーを啜った。その背中はいつもより寂しそうに見えた。

「江川さん、随分話と違うじゃないですか」
田村がじりじりと細身の江川ににじり寄る。
「い、いやぁ。そんなことはありませんよ。実際、権利者がいなくなってから随分時間が」
「そんなことはどうでもいい。本当は相当のワケあり物件なんじゃないですか」
午前八時半、役所が始まると同時に区の担当者江川を呼び出した。江川が来るなり、田村は作業現場の廃墟の軒先で問い詰め始めた。物件は随分な荒れようだし、変な機械やパソコンもある。下見段階では気付かなかったこちらも悪いが、「実は」なんてことがあるなら、それはそれであっちが悪い。ただでさえ気に食わず、表面上だけのやり取りしかしたくない相手に、田村は珍しくいらいらしていた。
流となぎさはそれを、庭の隅でしゃがんで遠目に見て面白がっている。だって、こんなに機嫌が悪い田村を見たことがない。
「江川さん、言いたくはなかったが、アンタ、うちに紹介する物件

はどれもろくなもんがない。いいとこは他の業者にやって、ウチは残りもんばかりだ。今回はしかも入札じゃない。『仕事がないからくれ』と言った社長の手前、強く言えない部分もあるが、いい加減にして欲しいもんだな」

身体の大きい田村に迫られると、江川はひょろっと折れそうな身体で上手に避け、また愛想笑いした。

「いやぁ、本当に一ノ瀬さんにはお世話になってますから。今回は緊急にお仕事が欲しいということでしたので、一番取り分の多そうな物件をですね」

「取り分の問題じゃァないだろう。ホントの所はどうなんだ。『厄介な物件だから一ノ瀬の連中に回しておこう』なんて思ったんじゃないだろうな。江川さん、俺は知ってるんだ。アンタ余所で『一ノ瀬の会社の人間は変わり者ばかりで好きじゃない』と言いふらしてるそうじゃないか。つまり、そういうことなんだろ」

そこまで言われると、江川は分が悪そうに目をそらした。やはり図星のようだ。

「い、『一ノ瀬さんところはみんな個性的だ』の間違いですよ。い、いやだなァ」

「言い訳なんかどうでもいい。責任とって貰うぞ」

田村は嫌がる江川の腕をむんずと掴んで廃屋の三号室に連れ込んだ。

「あーあ、残念。もっと見たかったのにな。仕方ない。流君、二階のゴミ分別始めるよ。六号室からだね」

なぎさは言って、流と共に手摺りの外れた二階へと続く階段を上り始めた。錆付き、ぐらぐらしていて今にも外れてしまいそうだ。歩いてみると見た感じよりもっと痛んでいるように見える。それまで外れずにいたのが不思議なくらいだ。

鍵の外れたドアを開け、カーテンの締め切られた室内に入る。気合を入れるように、二人はタオルで口元を覆い、ゴーグルをして帽子を目深に被った。

「そんじゃ、入り口から徐々に進めようか」
開け放したドアの外、後からやってきた康司と川岸のものと思われる車の音が聞こえていた。

パソコンのハードディスクがいくつも並び、ディスプレイにキーボード、マウス、何に使うのか分からないような大きな機械、電灯に、いくつもの記憶媒体。三号室の奥、パソコン音痴の田村には、ちんぷんかんぷんなものばかりがゴミに混じって散乱していた。
ダンボール、空き缶、菓子袋など、人が出入りした形跡が生々しい。
「廃屋の財産処分は依頼したのですから、こんな持ち主の分からないパソコン、廃棄してしまえばいいじゃないですか」
江川は無責任にもそう言い放った。
「何考えてんだアンタ。こんなところにな、こんなものがあること事態犯罪なんだよ。余所の民家か電線から電力窃盗してる状態だろ。これで犯罪の臭いがしないなんて、ゆとり公務員にもほどがあるぞ。さあ、どんなデータが入ってるのか、犯罪性がないかどうか調べてもらおうじゃないか。もし、ただ単にここに間借りしているだけってなら見逃してやらんでもないが、まあ、ありえないだろうな。こっちだって金が掛かってるんだ、遊び半分でやってるわけじゃない。こんな物件丸投げしておいてどうこう言い訳なんか聞きたくないね。きちんと落とし前つけてもらうからな」
凄んだ田村の勢いにおされ、江川は更に肩をすぼめた。
「落とし前って言われてもですね。こういうのは、一ノ瀬さんとこで解決なさってくださいよ。区の手からは今、離れてる状態ですよ」
「江川さん、そういうのはメンバーを見てから言うんだな。よく見ろ、まともにパソコンいじれる人間が、ウチの社にいると思うか」
「い、いや……」
「だろ。あいにく、ここに揃ってるのは『壊し専門』ばかりでね。パソコン普段から使い慣れてるお役人さんとはワケが違うんだよ。

――ほら、さっさと電源入れて」
江川は渋々、畳に直置きされた一台のパソコンの電源を入れた。途端に、周りの何台もの周辺機器が一同に機動し始める。
田村は思わずびくっとしたが、江川の手前、虚勢を張った。
ディスプレイが起動画面から切り替わる。全体に、肌色と薄紅色のものが映し出された。
「女性器かよ。悪趣味だな」
画像は少し荒いが、明らかにそれと分かる部位だ。ぱっくりと穴を開け、こちら側を向いている。田村が怪訝そうに画面を見ている隣で、江川が屈めた背中でゴソゴソ動き始めた。
「……何してんですか、江川さん」
自分の股間に手を置く江川に、田村は思わず突っ込んだ。
「い、いやぁ。随分こういうのとはご無沙汰だったもんですから、ちょっと……」
伸びた鼻の下を見せられても困る。それに、中年男が勃起したのを隣で見せられるのはいいもんじゃない。
「そんなのはいいから、さっさとデータを」
はいはいと、江川は股間から手を離し、マウスを握った。デスクトップに張られたフォルダの一つをクリックして、ファイルを展開する。
「これ、なんですかね。テキストファイルみたいですが、開けてみましょうか」
「……数字、人の名前？　漢字、漢字、三桁、七桁、名前、数字……。この前の方に書いてある漢字、よく見ると銀行名じゃないか」
「あ、ホントだ。すると、銀行名、支店名、支店番号、口座番号、名前、あとは……金額？」
「激しく犯罪の臭いがするな。他のファイルは？」
「あー、はいはい」
江川は無作為に別のファイルをクリックした。今度は画像データの拡張子が並ぶ。

「何かの画像がたくさん保存してあるみたいですよ。ひとつ、開いてみますか」
そのうちの一つをクリック。
表示された画像に、二人は思わず目を覆った。
「し、死体！」
声を裏返して驚く江川。
――そこには、バラバラに切り刻まれた女性の身体が鮮明映し出されていた。露出した肌、内臓、切断部。どう考えても、
「インターネットで見られる画像じゃないだろ。これは――」
額から伝う汗を拭い、ごくりと唾を飲んだ田村の耳に、微かに女性の悲鳴が聞こえた。
そして、壊れかけの外階段を激しく揺らしながら下りてくる足音。更に、流の声。
田村はすばやく立ち上がり、三号室から飛び出した。
「なぎさー！」
喉を枯らすほどの勢いで叫ぶ流の様子は尋常ではなかった。すっかり土のあらわになった庭先で、流は叫んでいた。駆け寄る田村の足音すら聞こえないほど懸命に。
「どうした、流。なぎさがどうかしたのか」
流の前に回りこみ、腕を掴んで存在を知らせる。
やっと田村の存在に気付いた流が、青くなった顔で切々と訴えた。
「わかんない。ダンボール足りなくなったから、ワゴンに取りに行くって、出てったら、悲鳴が……。どこにも、どこにもいないんだ……！」
なぎさと、さっきの惨殺死体の映像が田村の脳裏で重なった。
とてつもなく嫌な胸騒ぎがした。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１０：秘密

午前九時過ぎ、今朝方リサイクルセンターにゴミの持込をした康司と川岸が、社屋経由で現場に到着する。たった今到着したばかりだという二人の話で、流となぎさが作業中に聞いた車の音が第三者のものであることがはっきりした。

「誘拐、じゃないのか」

康司が言うと、

「そんなことは分かってる。社長には連絡した。警察には……確たる証拠がないと、捜索願を出しても無理だろうな」

田村が突っぱねる。

思案していた川岸が、腕組み、右往左往しながら田村に尋ねた。

「で、社長は何て言ってるんだ。こうなったら仕事なんて言ってられないだろ。何とか、探す方法はないのか。相手が車で移動しているとしたら……、目撃情報でも集めるか」

「社長は今日、便利屋組合の会合に出るんだよ。移動中なのか電話には出なかった。念のためメッセージは入れておいたんだが、まだ返事がない。それに目撃情報っていっても、朝の通勤通学時間帯に不審車両かどうかなんて、一般人が見てると思うか。朝晩は通行量、意外に多いんだぞ。この界隈」

「否定ばかりじゃ前に進まないだろ。あのパソコン画像、俺も見たが、あれは正直まともな人間のすることじゃない。とりあえずアレだ、あの刑事にバラバラ殺人と関連性のあるかもしれないパソコンを見つけたって連絡入れたらどうだ。乳児遺棄とバラバラ殺人に繋がりがあることはわかってるんだから、連絡しても差し支えないと思うが」

「そうだよ、田村さん。川岸さんの言うように、とりあえず出来ることは全部やろう。本当に何かが起きてからじゃ遅すぎる」

つなぎ服のポケットから携帯電話を取り出し、岬刑事の連絡先電

話番号をダイヤルしようとする流の手を、田村が遮った。「待て」と一言、電話を奪い取り、
「俺が喋る。流、お前は腰を抜かした江川を連れて社に戻れ。今の時間、事務所は空だ。社長が戻ってくるまでの間、もし万が一犯人からコンタクトがあったとしたら――。いいか、電話やメールがあったら、すぐに俺か社長に教えるんだ。余計なことはするな。あくまでもお前は連絡役。下手に交渉するなよ。なぎさの命が掛かってるんだ」
ギラギラと光る田村の真剣な眼差しに、流はすっかり圧倒された。背中に電気が走った。ひざが震えた。今、ここで起こっているのは夢か、現実か。判別できないほど、頭の中でいろんなものがグルグルと回った。
「何してる、走れ！」
流はもつれるような足で三号室に駆け込んだ。
まだほこりの舞う室内の奥で、ゴミに埋もれるように江川は仰向けに倒れていた。区名が刺繍された作業着の小柄な中年オヤジの身体を、流は必死に揺すった。気絶している。
原因がパソコン画面にあることは、すぐに分かった。生々しいグロテスクな映像が何枚も何枚も開かれていたのだ。肌色と赤、それらを切り刻んだと思われる刃物。フォルダ内の画像をサムネイルで表示しているものには集団レイプの写真。様々な年代の男たちが、一人の裸の若い女性を囲っている。
田村と川岸は、ここに流が入ることを拒んでいた。指示ミスか、田村が江川を連れ出すように流に言わなければ、この画像を彼が見ることはないはずだった。「まだ未成年だ」と、彼らは言う。しかし、それだけの理由で自分が除け者にされるのは許せなかった。
流は江川を揺り起こすのをやめ、向き直ってパソコンをいじり始めた。他にどんな映像があるのか。自分だけ知らないだなんて、何も知らされずにただ社へ戻るなんて、こんな状況下で許されるはずがない。

床に這いつくばって、畳直置きのパソコンの画面に喰らいつく。マウスを動かしてフォルダを開きまくった。もしかしたらなぎさを奪取した犯人が置いていったかもしれないパソコンだ。なにか、手がかりがあるに違いない。いや、あってくれ……！

「き、君……」

背後で意識を取り戻しかけた江川の声。

だがまだもう少し、もう少し。マウスを操作する手は止まらない。

体中が熱くなった。妙に興奮した。アンダーグラウンドに入り込むのは初めてだ。普通に生きていたら、絶対にお目にかかれないような、緊迫した状況が心地よくなっていく。外で必死になぎさを呼ぶ康司や川岸、田村が警察と連絡を取り合っている話し声さえ、流の聴覚は拒んだ。

死体、レイプ、拷問。若い流には刺激の強すぎる画像や映像が大量に表示される。違う、こんなんじゃない。もっと重要な何かが隠れているはずだ。数字や文字の羅列したファイル、これも違う。

「何、してるんだ」

いよいよ江川が意識を取り戻した。これ以上見てるわけにはいかない。

「い、いや、なんでもない。江川さん、俺と一緒にとりあえずウチの社に向かってくれる？」

振り返り、息を整えて背で画面を隠した。

そこには画面いっぱいに、大きな黒い人型の影が映し出されていた。

携帯電話を田村から受け取り、流は江川の乗ってきた区の公用車に乗り込んだ。まだめまいのする江川は、流にハンドルを任せ助手席に座った。

「警察が来るなら、私も現場にいた方がよかったんじゃ」

弱腰に言う江川。

「江川さんがいても、別に状況が進展するわけじゃないでしょ。そ

れより区に報告しなくちゃいけないんじゃないの。それとも報告なんか出来そうにもない？　撤去を依頼した無人の廃屋で作業中の便利屋の社員が一人行方不明で、その上無断で部屋が使用され、もしかしたらバラバラ殺人の関係者が使っていたかもしれないパソコンまで発見された。こうなりゃ、江川さんの立場も危ういもんね」

流はいつになく饒舌だった。

「君……、もしかして、状況を楽しんでやいないか」

エンジンをかけようとする流の手が一瞬止まる。汗が一粒たらりとあごまで伝い、横目でチラと江川を見た。その怪訝そうな視線が痛い。

「若いときはよくあることだよ。何かに巻き込まれるなんてごめんだけど、巻き込まれてみたい。巻き込まれたら巻き込まれたで、実は正直面白くて仕方ない。不謹慎だ。大切な人の命が懸かってる割に、君、笑ってるよ」

車は走り始めた。

昨日から下り坂の空はより一層の曇天へと変わってゆく。朝少し感じられた日差しも、今は分厚い雲の奥でなりを潜めている。冷たい秋の風が車窓から入って流の頬を掠めた。

『楽しんでる』……？　江川は面白いことを言う。事件に巻き込まれ、なぎさが行方不明になったこの現実を、楽しんでいるように見えるとは。確かに興奮はしている。つまらない毎日ががらりと変わったことへの充実感はないとは言えない。だけど、彼女を心配する気持ちは本物だ。多分、本物なはずだ。

「気になってたんだけど、君と彼女の関係は？　恋人にしては少しよそよそしいような」

「恋人なんかじゃないよ。義理の兄弟みたいなヤツかな。なぎさも俺も一ノ瀬の養子。親は互いに刑務所。俺の場合、いわゆるネグレクトってヤツで五つで施設に預けられたけど、なぎさはどうだったのか……。同じ屋根の下に暮らしてた頃から、あまり自分のことは話してくれなかったから詳しいことまでは」

「じゃあ、彼女のことは殆ど分からないってわけか」
「そうだよ。意外とそんなもん。近しいほど分からない。『過去のことには触れない』ことが一ノ瀬との養子の条件だったし。――とはいえ、大人たちは実は全部知ってたりする。田村さんだって、知らないうちに社長から全部聞いてた。『受け止められる年齢』とかって、あったりするのかな。俺はなぎさのことを全部知るには、まだ年が足りないって言うことなのか。全部知ってたら、もっと親身に心配できたのかな」
「それは間違いだよ」
江川の意外な答えが助手席から聞こえ、流は一瞬左を向いた。
「他人の秘密を全部知ってどうするの。過去も秘密も、知ればいいもんじゃない。それだけがその人を判断するための材料になると思う？　要は心の問題だよ。どんな秘密も許容できるほど心が成長しているかどうか。その線引きとして、一ノ瀬の社長はたまたま年齢を使ったんだと思うよ。流君、失礼だけど、私から見ても君はまだ心が幼すぎる。社長はそれを知ってて、君に何も教えてくれないんじゃないのか」
ぽつぽつとフロントガラスに落ちてくる雨粒の音が、次第に強くなってくる。アスファルトに雨粒が少しずつ染みを広げ、やがて全てを濃い黒へと変えてゆく。
風が強まり、車体が揺られる。
薄暗い街の中を、車はライトを点けて進んだ。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１１：電話

便利屋一ノ瀬の社屋に着く頃には、すっかり大降りの雨になっていた。路肩に車を止め、ようやく体調の戻った江川と運転を変わる。
「俺、社で電話番するように言われてるから。江川さん、ありがとう。俺、江川さんのことちょっと見直した」
運転席のすぐ脇に立ち下を向く流は、少し恥ずかしそうだ。
車内に雨が入らぬよう、少しだけ隙間を空けた車窓から江川の顔が覗く。
「いや。大した事は言ってないよ。彼女、無事だといいな。こっちも区役所で情報収集してみるよ。ホラ、これ以上濡れたら風邪引く。早く行きなさい」
一昨日出会ったばかりの自分に、諭すように話してくれた言葉を思い出し、流は深々と頭を下げた。

鍵の掛かった玄関をパスワードで開錠し、中に入る。普段ならこの時間、社長かなぎさが電話番をしているが、今はいない。便利屋組合の会合がいつまでかかるのかもわからない。田村の言った通り、この危機的状況下で社屋が留守なのは確かに痛い。
留守電には特にメッセージは残っていないようだ。なぎさがいつも使っている事務用のパソコンにも、社長席のパソコンにも、メールは来ていない。
なぎさがいなくなってから三十分が経とうとしていた。時間が経てば経つほど、なぎさの身の安全が保障できなくなる。なんとかして、彼女を救う手立てがないものかと、無い頭をフル稼働させていたその時、ふいにつなぎ服のポケットの中で流の携帯電話が鳴った。
「は、はい。流で」
『おい、何回電話すりゃいいんだ。緊急事態なんだからさっさと出ろ！』

一ノ瀬の声だ。
「社長、お疲れ様です」
『挨拶なんてしてる場合か。おい、今どこだ』
「社に戻ったとこ。社長、会議は？」
『まだ終わんねぇよ。それより、お前、ちょっとはパソコンいじれたな』
「まぁ、月並み程度だけど」
『そしたらお前、俺のパソコンにあるＧＰＳのアイコンをクリックしてみろ』
声の通りに社長の机に移動し、回転椅子に座った。画面の左下にあるＧＰＳアイコンをクリックすると、専用のソフトがゆっくりと立ち上がった。
「――社長、会議っていつ終わるの。なぎさ、大変なんだよ。会議とか言ってる場合じゃないじゃん」
気弱な流の発言に、一ノ瀬は困惑しているようだ。
社長の一ノ瀬に田村から一報が入ったのは、朝九時少し過ぎ、便利屋組合の会合が始まった直後だった。ゴミ処理場で起きた最近の資源窃盗とバラバラ殺人について情報交換をするため、区の産業会館に東京中の便利屋の社長、代表が集まっていた。
会議が始まるか否かのうちから、様々な情報が飛び交った。それは信憑性のあるものから、関連性の薄いものまで、実に様々だったが……、全ての推理を繋げていくには事足りた。一緒に会議に出席した警視庁の特別捜査班の捜査情報を交え、パズルのピースをはめ込むように少しずつ突き詰めていく。
徐々に明らかになっていく事件の全体像。それはあまりに衝撃的であったが、一ノ瀬は流との電話ではそのことについて話すことをためらった。
『今、昨今の事件について話し合ってる。情報交換中だ。もう少し時間が掛かる。田村の指示に従え。――どうだ、クリックしたか』
「したよ。地図が出てきたけど」

『じゃあ、左のメニューにある、なぎさのボタンを押してみろ。携帯に電源が入っていれば、今どこにいるか表示されるはずだ。お前らがどこで作業しているか把握するために、位置がわかるようになってるんだ。どうだ。地図、出たか』
「あ。で、出た。港。あのゴミ処理場の近くの、港だ！」
『港……』
そこで一ノ瀬の声が詰まった。
本降りになった雨の音が会話を繋ぐよう、事務室に響いた。時折雷も鳴る。外は荒れに荒れていた。
『おい、流。そしたら、メニューの一番上、メールボタンを押してくれ。地図が俺の携帯に送信される。――いいか。そこから動くなよ。もしかしたら奴らも、俺たちの動きを伺っているかもしれん』
「え、何。聞こえない」
『メールボタンを押して、送信。後は待機。分かったな』
一方的に電話が切られた。流は不満そうに携帯の画面を覗く。
仕方なく、指示通りにメールを送った。
「社長、何してるんだよ」
流はまた、自分が蚊帳の外に追いやられているのではないかと不安になってきていた。一人、現場から遠く離れた社屋で何をしろというのか。犯人からの連絡なんて本当に来るのか。確証も無いのに、ただ待つのは辛い。
『実は正直面白くて仕方ない。不謹慎だ。大切な人の命が懸かってる割に、君、笑ってるよ』
江川のそんな台詞が、流の脳裏に浮かんだ。
そうだ。俺はもしかしたら、事件に関わっていたいのかもしれない。あの乳児遺体と遭遇したときから、自分の周りで次々に起こる事件が、実は面白くて仕方が無い、その通りだ。それが偶々、自分が未成年で、まだ未熟だという理由だけで事件から疎外されていく。年齢ってなんだ。経験ってなんだ。同じ事件に関わっていながら、どうしてこんなにも行き場が無いんだ。

思考回路がグルグルと回り始めた。悪い癖だ。一度考え始めると、もうどうしたらいいか分からない。制御できなくなる。思い出さなくていいこともまで全部思い出して、関係ないはずなのに何でもかんでも関連付けてしまう。それこそ、一ノ瀬に引き取られたあの日の風景から、小さな時分、何日も何日も一人ぼっちで過ごした日々まで――、マイナスの思考が流を支配していく。なぜ生まれた、なぜここにいる。そんな些細なことまで、グルグル、グルグル、グルグル……。

トゥルルルル……トゥルルルル……

がばと顔を上げた。伏していた社長机にはよだれが付いていた。寝ていたのか。

机の左上、電話が鳴っている。

流は慌てて受話器を取った。

「はい、こちら便利」

『便利屋一ノ瀬ハ、コノ電話デ間違イナイ？』

変声器を通した独特の高い声。

眠気眼の流を一瞬で現実に引き戻す。

「そうだけど」

時間を確認した。壁掛け時計が、午前十時二十五分を示している。外はまだ雨だ。降りしきる雨音に相手の声がかき消されないよう、音量を最大にして、電話の横にあるメモ帳を手繰り寄せる。

『彼女ノツナギ服ニサ、「便利屋一ノ瀬」ノロゴマークガアッタンダ。作業ゴ苦労様。彼女、カワイイネ。年上ノ女性、結構好ミナンダヨ』

ゆっくりと淡々とした、いやな喋り方だ。耳に残る。響く。

何とかメモをとろうとするが、右手が思うように動かない。雨と心臓の音も邪魔する。恐怖で視界が定まらない。

『――ネェ、知ッテル？　結構サ、多インダヨ』

「な、何が」
流の必死に振り絞った一言に、相手は嬉しそうにケタケタと笑った。
『貧乳フェチ。フフフ。イイオモチャガ手ニ入ッタ。……サア、オ楽シミハコレカラダヨ。巨人ト女ノ宴ダ。果タシテ止メラレル、カナ』
「おい、何を言って――」
『君モ子供ダネ。楽シモウヨ』
会話が途切れた。
受話器を握り締めた、流の右腕が更に震えた。思い切り、机に叩きつける。バウンドした受話器は電話機本体を引き連れて、社長机の外へと投げ出された。
立ち上がり、両手で頭を覆う。屈み、叫ぶ。
声にならない声が、激しくなる雨の音とぶつかり合った。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１２：暴走

廃屋の現場に駆けつけた岬刑事としばらく話し合った後、田村は軽ワゴンに乗り込み、康司や川岸と一緒に社屋を目指した。後から岬とその部下の乗ったパトカーも続く。

車内で何度か社長から携帯に連絡が入った。社屋にいるはずの流と急に連絡が取れなくなったのだという。更に、論点を整理するにはとてもじゃないが複雑すぎるくらい様々な事件が入り組んで、電話では説明しきれないとも。会議が終わり、これから戻るという一ノ瀬と社で落ち合う約束をする。

雨脚が強く視界が悪い中、軽ワゴンはがむしゃらに進んだ。ワイパーも利かなくなるくらいの土砂降り。早く、早くたどり着いて、事の真相を見極めなければならないのに。雨はそれを拒むかのように更なる攻撃を仕掛けてくる。黒く澱んだ空は田村たちを嘲笑うかのように雷を叩きつけてきた。

早く、早く。焦れば焦るほど、信号機は交差点のたびに赤色で、ワゴンを阻む。

「流、大丈夫かな。あいつ、結構無謀なところがあるから」

車窓に叩きつけられた雨粒が、後ろに後ろに流されていくのを見ながら康司が言う。

運転席の田村は悔しそうに、背中の康司を少しだけ振り返った。

「俺が、俺が悪いんだ。完全なミスだ。あいつにあれ以上刺激を与えたくなかったのに、余計なことを。俺が、江川と一緒に行けだなんて言わなければ」

「田村さん、それは言いっこなし。止めなかった俺も同罪だ」

助手席の川岸も、沈んだ声で会話に乗った。

「流のヤツ、江川さんを起こしに行ったとき、勝手にパソコン画像を見てたんだよ。田村さんや俺たちが余計なものは見せまいとして気を使えば使うほど、あいつは貪欲になった。まだ子供だなんて、

俺たちみんながどこかで思っていたのかもしれない。あいつはあいつなりに、事件に向き合おうとしたんじゃないのか。『未成年だから』『まだ経験が足りないから』って差別は、本当はよくないんじゃないのかな」

「そう思うのはそっちの勝手だ。悪いけどそういうのは『差別』とは言わない。川岸、お前ももう少し経験が必要だな。あいつみたいな若造は、過去に嫌なもん引きずってる分、タチが悪いんだよ」

「過去に？　流が？」

「あいつ、親に捨てられたんだ。五つの頃にな。喰うものもない、小汚いアパートに数ヶ月放置され、社長に助けられたのさ。捨てられたと思ったんだろうな、今回も。自分ばっかり仲間はずれにして、って。完全な判断ミスだよ。あいつの気持ちを考えてやれるのは俺だけだと思っていたのに、だから社長も俺に流を任せたのに。最悪だ。最悪すぎる」

田村のハンドリングは荒かった。滑りやすい雨の日、慎重な運転など、出来る精神状態ではなかった。とにかく急いで、流の元に行かなければと――。

パトカーが後から付いてきていることも、視界が悪いこともお構い無しに、田村はスピードを出して進む。そして大きな交差点に差し掛かったとき、

「田村さん、危ない！」

川岸の声に驚いて、田村は慌ててブレーキを踏んだ。車がスピンし、交差点中央で止まる。

反動で、田村と川岸の身体がぐいと前のめった。シートベルトをつけていなかった後部座席の康司は、ごろんとそのまま前と後ろの座席の間に転がり落ちた。

「な、なんだ。急に！」

「ったー！　田村さん！　痛いよ！」

田村と、転げ落ちた康司が矢継ぎ早に文句を言う。

が、次の瞬間、それまで薄明るかった車内が暗転する――。

巨大な黒い影が、目の前を横切った。大きな機械音、ドシンという振動。
賑やかな街が、一瞬にして闇に飲み込まれた。
『黒い大きな影を見たという証言もあり、警察は原因を――』
事務所で見たニュースを思い出した。
「真昼間だぞ！」
田村は頭をもしゃくしゃとかき回し、影の動いた先を覗く。
人の形を模した獣のような、無機質で黒い影。五階建てビルの高さほどもあるその影の、のそり、のそりと歩く先は。
「港だ、港に向かってる」
「港って――、まさか、なぎさが連れ去られた場所じゃないだろうな」
横目で確認しながら、田村は狂ったようにアクセルを踏んだ。
「何かが、とんでもないことが同時多発的に起きてる。これが偶然じゃなくて、なんだって言うんだ」
軽ワゴンとパトカーは、再び便利屋一ノ瀬の社屋に向かう。黒い影がなぎ倒した街の残骸を避けながら。

「流のヤツ、社に残っていた原付でどっかに行っちまったらしい。恐らくは、なきさの携帯の発信源――、港の方角だ。だが、確証はない。携帯も置いてくし、連絡をとる方法が何一つない」
一ノ瀬が到着したとき、社屋に人影はなかった。予備の五〇ｃｃ原付バイクが一台無くなっているところを見ると、これで流が移動していると見て間違いはない。受話器が上がったまま床に投げ出された社長用の電話器と、流の携帯電話。パソコンの画面は「送信完了」のウインドウが出たまま止まっている。
雨で濡れ、汚れた室内。蹴散らされ、散らばった書類、床に放り出された電話や筆記具。
呆然と立ち尽くす一ノ瀬を、田村はどう慰めてよいか途方にくれた。一緒にやってきた川岸、康司、岬や刑事たちも、事務所の荒れ

具合を見て息を呑んだ。
「――本当に、申し訳ない。田村、許してくれ」
躊躇なく頭を床につける一ノ瀬。小刻みに震える背中が痛々しい。
「どうして、どうして社長が謝るんです」
田村が顔を上げてと懇願しても、身体を揺すっても、一ノ瀬は土下座したままそこから動こうとしなかった。ただただ、額を床に擦り付けるようにして、
「義理とはいえ、親の俺の教育がなってなかったんだ。迷惑をかけた。あいつ一人の暴走で、余計な手間をかける。本当に、申し訳ないことをした」
「それは、俺の指示ミスです。社長のせいでは」田村がフォローしても、
「いや、それは違う。俺が――」
堂々巡りだ。普段気丈な一ノ瀬も、養子の中で一番末の流のことになるとたがが外れてしまう。
痺れを切らし、様子を見ていた岬が前に進み出た。
「一ノ瀬さん、捜査本部との会議、何か収穫あったんでしょう。なぎさんの身も心配だし、……もちろん、流君のことも考えなくてはならないけど、先へ進みましょう。さ、顔を上げて」
「け、刑事さん、すまねぇ……」
ようやく立ち上がり、鼻を垂らし、涙と雨でぐちょぐちょになった顔を両手のひらでごしごしと擦ると、一ノ瀬は気合を入れるようにパンパンと頬を叩いた。
「そんじゃぁ、気を取り直してってことで。ちょいと、集まってくれるか」
一ノ瀬はいつものシャッキリ顔に戻り、応接テーブルに何やら書類を広げ始めた。この界隈の地図と、文書だ。どっこいしょとソファーに座り、皆を呼び寄せる。
田村はほっと胸を撫で下ろし、岬刑事に一礼する。軽く目を閉じて、どういたしましてと微笑む岬は、こういった場面に場慣れして

いるのだろう。一人冷静に散らばった書類や電話をそっと元通りにして、何食わぬ顔で一ノ瀬の説明に聞き入った。さりげない優しさに救われる。

「今、十時四十五分。流と最後に連絡を取ってから一時間と少し。時間が経ち過ぎれば、なぎさも、流も危ない。手短に話そうと思う」

田村たちが頷くのを確認して、更に一ノ瀬の話が続く。

「一週間前、流が乳児遺体を発見した。その四日後、岬刑事が来て、母親がバラバラ死体で見つかったと聞いた。廃屋で見たバラバラ殺人の画像が今回の被害者のものかどうか、今、警察が調べてる。一緒にあった強姦映像も関連性があるとしたら、強姦、妊娠、出産の後、子供と母親を別々に遺棄したと見て間違いないだろう。どちらも捨てられていたのはゴミ処理場。偶然じゃない……だよな、岬刑事」

「ええ、そうよ。ここで疑問なのが、乳児遺棄の現場で監視映像に映っていた黒い影。昨日、そして今日ここに来る前にも現れたあの大きなものと関係があるのかどうか。そこが引っかかっていたのよ」

「うむ。さっきの会合で聞いたんだが、実はあの黒い影の騒ぎというものは、新聞やニュースに取り上げられていなかっただけで、インターネットでは随分前から噂があったそうだ。郊外の山間部で何かを見ただの、港、住宅地、実に様々なところで何回も目撃されていた。だが、いずれも目撃されたのは深夜帯だったため、大騒ぎにならずにすんでいた。ところが最近、急に目撃情報が多くなる。これが、金属資源の盗難とぴったり時期が重なるんだ」

「それってつまり、盗まれた金属は――、あの黒い影のようなものの製作に使われた可能性があるってこと」

まさかと弱気に発言した康司の肩を、一ノ瀬が叩いた。

「捜査本部の話では、なきにしもあらず、というところらしい。子供だって部品さえありゃ小さなロボットを作れるような時代だぞ。金と技術が揃えば、アレだけ大きい人型ロボットを作れないわけがない。その材料として金属資源ゴミを盗み、その度に作ってたとし

たらどうなるか。まあ、これもどうなのか、調べてる最中らしいけどな。調べるだのどうこう言ってる合間に、やつら昼間でも堂々と動き出してる。これが、遺体遺棄やバラバラ殺人と、上手く繋がればいんだが……」

チラと岬の方を確認する。一ノ瀬の後方で、彼女は誰かと携帯電話で話していた。何度も頷き、メモを取る。一ノ瀬の視線に気が付いたのか、彼女は電話をやめた。

「ごめんなさい。たった今、警視庁から連絡が」

「どうです、何か分かりましたか」

「あの画像。廃屋のパソコンにあった画像データは、この間の事件の被害者で間違いないと。つまり、埋め立てゴミ置き場で最初に発見された遺体と、バラバラ殺人、それから廃屋のパソコンが全部繋がったのよ。それから――」

岬は不意に、社長机に置かれていたテレビのリモコンを持ち出した。電源を入れ、ニュースチャンネルにあわせる。

「あの黒い影」

壁掛けテレビの画面に映し出されたのは、街をヘリコプターから見下ろした映像だった。

港が画面の上部に見える。自衛隊のヘリコプターが何機も旋回し、複数のパトカーの回旋灯が激しく点滅する。あちこちから煙が上がり、火の手が上がっているではないか。

何が起きているのか、一目は分からない。しかし、目を凝らせば雨の街に、いくつかの大きな黒いものがうごめいて見える。あの、巨大な影だ。

「どうやら一つではないらしいわ。今、何体もの影が現れ、街を破壊して回ってる。どうしてこのタイミングなのか、なぎささんの拉致と何か関係があるのか。警察でさえ、まだ分からない状況よ」

Episode13：接触

雨粒が激しく叩きつけた。秋風と共に流の身体を急激に冷やしたが、そんなことは問題ではなかった。

前に進みたかった。じっとしていれば、頭は余計なことを考える。忘れていたことを思い出す。とにかく動いて思考回路を止めなければ自分はダメになるような気がしていた。「余計なことはするな」と田村や一ノ瀬に言われても耳を貸すことなんて出来やしない。

社屋から住宅地を抜けて下り坂の道を通り、商店街、町工場の軒並みを見ながら港へ向かう。

スコールのような雨。いつからだろう、東京の雨がこんなにも激しく、情緒なく降るようになったのは。地球温暖化が原因だと聞いたこともある。一年の平均気温が二十度に迫り亜熱帯へと近付き始めた今日、豪雨は珍しいことではない。しかし、今日のように先を急がなければならない日に限って降るのは、何か見えざる力が働いているとしか思えない。

工場街を原付で進む。土砂降りの中、雨具も着ずに走る流を、軒先で不思議そうに眺める人々。機械と油の臭いがした。普段嗅いだことのない臭いはいい刺激になる。目が覚める。

こうして原付バイクを走らせている間も、背後では黒く巨大な影たちが雨のカーテンをくぐるようにのっそりと現れ、街を我が物顔で歩いていく。通り過ぎていった住宅街や商店、工場さえ、犠牲になってしまったのかもしれない。しかし、振り返ってそれを確認することを流はしなかった。

港へ出る。倉庫の連なる道を、更に進んでいく。なぎさの携帯の発信源、画面印刷した紙など、手に握っていたがとうに千切れ濡れて跡形もなくなってしまった。記憶だけを頼りにバイクを走らせた。

積荷を一時保管するための倉庫が特徴なくいくつも並んでいた。壁面に数字が並び、それだけが唯一他と違うことを表している。確

か、丁度この辺りだ。
流は原付から降り、ヘルメットを脱ぎ捨てて、その一つ一つを確認し始めた。扉を開け、中に入り、なぎさを呼ぶ。反応がなければ次へ、次へ。
「どこだ、なぎさ……」
息が切れそうだ。動悸が激しく、焦燥感で胸が苦しくなってきた。
雨の勢いも弱まらないのに、びちゃびちゃと足元の悪い中を汚れたスニーカーで駆けずり回る。まるで映画のワンシーンのようだと、半分心の中で笑いながら動いている自分がいた。不謹慎だ。そう分かっているのに、頭は現実とはかけ離れたどうでもいいことを常に考えている。興奮はしていたが、頭の中はどこか冷静だった。
何番目かの扉を開ける。飼料の山積みになった倉庫の内部に、なぎさを呼ぶ流れの声が響き渡る。
「ここもダメか」
諦め、振り返った刹那。流は何者かに、後頭部を殴られた。

社屋に残った一ノ瀬は、気丈な振りをしていたがどこか覚束なかった。もしかしたら連絡が来るかもしれない。流か、それとも犯人からか。予測できない中で電話を待っていた。
警視庁から特別捜査班の一員がなだれ込み、会話を録音するための機械を電話機に接続している。いつもは作業着や依頼のスケジュールが山積みになっている社員の事務机は捜査員に占拠され、いかにも物々しい雰囲気になってきた。
社長机に向かい、電話とにらめっこしながらじっと待つ一ノ瀬に、一緒に待つことになった川岸が元気付けるように言った。
「社長、大丈夫ですよ。なぎさも流もきっと無事です。今、田村と岬刑事が向かってるんですから。待つ事だって、立派な仕事ですよ。待つ人がいるから帰ってくるんです。社長は社員に『ご苦労様』とねぎらえる唯一の存在じゃないですか。大丈夫、きっと大丈夫」
一ノ瀬はただただ、うんうんと頷いていた。

「警察の見解は分からないけど、俺が思うに、狙われたのはウチじゃなくて便利屋業界全体なんじゃないですか。その中でたまたまウチが何度も現場に遭遇しているだけのような。個人的な恨みを買うような事業はしてないでしょ、ウチの社は」
「確かに、そうなんだがな」
「じゃあ、そんなに心配することは」
「いいや。人の恨みなんて、どこで買ってるか分からんもんだよ。慈善事業家みたいなもんだからな、便利屋なんて生き物は。親切してるつもりでも、案外嫌なやつだと思われていたかも知れん。今まで何十年かやってきたが、その中でどれくらいの人間に接し、どれくらいの人間から恨みを買っていたかなんて、はっきり言って考えたこともなかった。だが、なぎさが誘拐され、流まで行方不明になってしまったとなれば、やはり何か俺に落ち度があったとしか考えられんのだ……」
雨はまだ降り続けていた。弱まったり、強まったりしながら、延々と続く。この雨の一日がいつまでもいつまでも終わらないような、そんな感覚さえ一ノ瀬には生まれていた。
「止まない雨はない。って言うでしょ。事件は必ず解決します」
力強く言う川岸だが、その台詞のそこかしこに不安めいた感情が見え隠れする。一ノ瀬に見えぬよう、川岸は震える手をそっと後ろに隠した。
「――電話です、社長さん、出てください！」
捜査官の声。同時に着信音が鳴った。コール二回、三回、受話器をとる。
「お電話ありがとうございます。便利屋一ノ……」
『今日ハ。オ昼ゴハンハコレカラ？』
変声器。犯人だ。
ごくりと唾を飲む一ノ瀬。受話器に一緒に耳をつけた川岸にも、明らかに不自然な声が聞こえてきた。
「どのようなご用件で」

あくまでも冷静に努める一ノ瀬に、その声は逆上した。
『本当ハ、コレガドンナ電話カ、ワカッテンダロ？』
「ご用件は」
『オマエノ所ノ作業服ヲ着タ社員ヲ二人、預カッテル。警察モイルナ？　マァ、捕マエルコトナンテ、出来ナイダロウケドネ。外ハ大騒ギ。巨人ガ街ヲ壊シテル。コンナ状況ナラ、二人クライイナクナッテモ、誰モ咎メタリシナイダロ』
「ウチには、不要な人間はいないよ。そこ、港か？」
『――目ヲ覚マシタカ』

「社長、社長聞こえるか、やつら、子供だ！」
会話の内容で相手が一ノ瀬だと分かり、危険と承知で声を出した。力の限り叫んだ。だが、流の声が果たして伝わったか。相手の携帯電話が通話を終え、パタンと閉じた。
薄暗い倉庫の中、気が付けば十人ほどの少年たちに囲まれていた。気絶しているうちに倉庫に連れ込まれ、引きずられたのか背中が痛い。加えて雨に濡れた作業つなぎが体温を奪う。唇と肩が震えた。
「何喋ってんだ？　そんなこと向こうに伝えてどうすんの。馬鹿だなァ」
携帯電話で話していた少年が鼻で笑った。
「カケル、こいつ、どうする？　女なら輪姦（まわ）すとこだけど、男は……、ボコるか。それとも殺（や）るか？」
別の少年。
「殺っちまってもそれまで。だけど、少しは楽しませてくれるよなァ、『同朋』」
その手にはスタンガン。金属バット、鉄パイプを持ったやつもいる。揃いの黒いＴシャツには「ＫＩＬＬ　ＹＯＵ」の文字と白いドクロ。いかにもという雰囲気をびしびし感じる。
カケルと呼ばれた少年がゆっくりと流のそばに歩み寄ってきた。倉庫の中央、囲まれた流は逃げることもままならず、腰を少しだけ

下に落とした。
「なぁ、お前、流だろ。大木流。今は、一ノ瀬……、流？」
扉の隙間から差し込む白い光が、少年の顔をうっすらと照らし出す。にやりと不敵に笑うその顔から出た意外な言葉に、流は息を飲んだ。
「何で……、俺の名前知ってんだ」
寒気が更に襲い、視界がブレる。必死に意識を保ちながら、流は少年の顔を注視した。
「お前が俺のことを覚えてなくても、俺は覚えてる。お前が連れてこられたときから、便利屋のオヤジに引き取られるまで、ずっとだ。どうだ、思い出したか。流、お前の後ろにいつもくっついていた、小さな子供のことを」
「し、知らない。俺は、覚えてない。誰だ、お前、誰だ！」
「ハハッ。まさか本当に覚えてないなんてな。困るなァ。それじゃ、俺の恨みなんか話しても、全然面白くないじゃん。――忘れたなら、思い出させてやる。あの、孤独で悲惨な日々をな！」
目の前でスタンガンの電流が走った。青白い光に萎縮する。必死に首を振ったが、カケルはその手を止めなかった。
今、この濡れた状態でスタンガンの電流に触れたらどうなるか。
「や、やめろ、やめてくれ！」
バチバチッと、火花が散るような音と共に全身に電気が走った。猛烈な痛みが流を襲う。息をする間も与えないほどの衝撃が身体中を駆け巡り、流はのけぞるようにして床に倒れこんだ。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１４：追求

途切れた電話の向こうで微かに聞こえた何者かの声。録音したその音声を分析する捜査員たち。
「間違いなければ、『子供だ』と。『社長』と聞き取れる箇所もありましたが」
「声のトーンが違うところを見ると、犯人以外の台詞だな」
「となると、拉致されたと思われるなぎささんか、行方不明の流君か……」
「流だ」
一ノ瀬は感情を抑えきれずに、思わず声を上げた。
「流のヤツ、港までたどり着いていたんだ」
川岸が頷く。昼間になって一時帰社した社員たちに事情説明していた康司も、大きく頷いた。
雨は少しずつ弱まってきた。合間を縫って社員たちが次々に戻ってくる。余裕なく、事前連絡することすら出来ずにいた一ノ瀬たちは、バラバラに戻ってくる一人一人に今日の出来事を簡単に説明していた。
雨が降っても黒い影が町中を暴れまわっても、仕事を投げ出すことは出来ない。個人依頼の仕事をきっちりこなした面々にねぎらいの言葉をかけつつ、警察の相手をする一ノ瀬。混迷している現実の中で、流と思われる声が聞こえたことは何より嬉しいことだ。
「流の台詞、『子供だ』……って何でしょう。犯人がまさか、『子供』……？」
川岸と一ノ瀬が唸っていると、捜査員の一人が声をかけてきた。
「もし、本当に犯人が『子供』だとしたら、この事件、解決するまでかなりの時間を要しますよ」
「どういう意味ですか」
「『未成年保護法』の条文に『未成年を傷付けたものは』というの

があって、それに当たらないよう、十分配慮しなければならないんです。もちろん、我々警察だって例外じゃない。本当に彼らが未成年なのか、未成年だったとしても犯罪の中でどのくらいの責任を負う立場だったのか。そういうのは、結局裁判にかけてみなければ最終判断できないんですよね。となると、その時々の状況で犯人を傷付けるようなことは絶対あってはならないわけです。今回のように相手が電話越しだったり、あの黒い影のように武装していたりすれば、実際のところ犯人の正体は捕まえてみないと分かりません。より慎重な捜査が必要になってくるんですよ」

「犯人を生け捕りにするのは基本だろう。それは、年齢がどうとか、そういう問題じゃないと思うが」

捜査員の言葉に困惑した一ノ瀬が、自分なりの疑問をぶつけてみる。

「もちろんそうです。ですが、例えば凶悪犯の場合、逮捕時に急所を外した攻撃をする場合があります。威嚇射撃もありうるでしょう。ところが未成年者が犯人の場合は、こうした攻撃も法に抵触する恐れがある。司法がどう判断するか。下手したら行為を行った警官や自衛隊員、指示した警察本部も皆、檻の中に入れられてしまうかもしれない。恐ろしいことなんですよ」

スタンガンを押し当てられた流は、あまりの痛みにのた打ち回っていた。電流の当たった腹部が異常に痛い。神経が麻痺し、ビリビリと痙攣を起こす。

「どう、電気ショックでちょっとは昔のこと、思い出した？」

カケルはスタンガンを放り投げ、にたにたと笑いながら流の正面に屈んだ。つなぎの襟元を左手で掴み、ぐいと顔を近づけてくる。鋭い眼光に、流は完全に圧倒された。

「昔のことなんてとうに忘れたって顔だな。眼もすっかり大人しくなりやがって。まるで飼い犬に成り下がってる」

唸り声しか出せない流に、カケルは執拗に詰め寄った。

「お前が昔俺にしたことは、本来なら傷害罪、ムショ行きだ。たまたまお前が子供で、保護されてる身だから見逃されていただけ。何度殺されかかったか」
違う、と何度も首を振る。目が泳ぐ。
「――お前みたいな珍しい名前、他にいるかよ。人違いなんて言わせねぇぞ。流ェ！」
右ストレートが流の頬を直撃した。衝動で身体がぶっ飛ぶ。コンクリに頬がこすれて、血がにじんだ。続けざまに立ち上がり、カケルの脚が腹部を蹴り上げる。
右手を上げ、周囲に合図。黒い少年たちが武器片手ににじり寄り、流に一斉攻撃を始めた。
鉄パイプが眼前に迫る。流はビクと反応し、身体を起こした。直後、金属バットが背中にヒットする。屈み込み、悶えたところを踏みつけられ、腹から血と胃液が溢れ出す。
殺される。間違いない。やつらは本気だ。
時折笑い声を上げながら攻撃してくる彼らの姿はまるで悪魔だ。躊躇なんて言葉はそこにはない。
『お前が昔、俺にしたことは、本来なら傷害罪、ムショ行きだ。何度殺されかかったか』
殴られながら、カケルの言ったことを考えていた。流が彼らと同じだったとでも言わんばかりに、カケルは罵倒した。養護施設で一緒だったというカケルのことを、なぜか思い出すことすら出来ない。『過去のことには触れない』ことを条件に一ノ瀬夫妻の元で過ごすうちに、心がどんどん洗われていったのだ。誰一人、流を問い詰めたりしない、蒸し返さない。そうして次第に、全てを忘れていったらしい。
「お前が俺によくやってたことをしてやるよ」
携帯発火装置を手にした別の少年が、カケルに鉄パイプを渡した。踏みつけられ、数人に押さえつけられて仰向けになった流は、そのパイプの先が火で熱せられていくのをただ見ているしかなかった。

その先が熱を帯び、徐々に赤くなっていく。
少年の一人が、カケルの指示で流のつなぎ服のボタンを無理やり引きちぎった。シャツをめくり、肌があらわになる。
「タバコの火か熱した鉄パイプを、お前は俺の背中に何度も押し当てた。自分が自我を保てないほど追い込まれた腹いせに、だ。こういう傷跡は、一生残るんだよ！」
カケルの手が、パイプを流の腹に食い込ませた。肌の焦げる臭い、音、そして、流の悲鳴。噴出す汗も、涙も、腹の底から助けを求めた声さえ、少年たちの嘲笑の誘った。
「ホラ、思い出した？　いつも悲鳴上げてたろ。今のお前みたいにさァ」
何度も何度も、パイプの先で突き刺してくる。その度に過剰反応する流の身体を、やつらは更に蹴飛ばす。
「や、めろ……」
声を振り絞った。腹筋に力を入れ、押さえの弱くなった少年らの足をすくい上げた。
ぐちょぐちょに汚れ、傷だらけになった身体で、パイプを弾き飛ばす。
やつらの軽い身体が思ったより簡単に倒れ、流の周囲から離れた。カラカラと音を立て、熱いパイプの先が転げた。
「な、舐めんな。便利屋、舐めんな」
気持ちを奮い立たせ、ゆらりと二本足で立つ。身体のあちこちから流血し、濡れたつなぎにじんでいる。腫れ上がった顔、だらしなく口から流れ落ちる血を腕でそっと拭い去る。
この状況で立ち上がる流に、少年たちは驚異した。ひとり、また一人と流のそばから離れていく。
だが、その中でただ一人、カケルだけは余裕の笑みで、一度弾かれた鉄パイプを拾い上げ、ぶんぶんと振り回しながら流と対峙した。
「何が便利屋だ。お前も俺らと同じ、世の中のゴミの一つに過ぎないんだぜ。捨てられ、荒んできた仲じゃないか。今更カッコつけた

ところで、何も変わらないし、何も救えないよ」
「なぎさは、どこだ」
「なぎさ？」
カケルはわざとらしく答えた。
「ああ、あの貧乳童顔の彼女ね。――さぁ、どこかな。一発犯りたかったけど、先客がいてさ。くれてやったよ。あのボテ腹が子供なんか産むもんだから、丁度オモチャがなくなって困ってたんだ。まさに好みの女だって、相当喜ばれたな」
「どういう、ことだ」
「相変わらず頭が悪いね、流。売ったんだよ。いい値段で売れるんだ。今頃、得意先じゃお祭り騒ぎ。何人の相手をしてるかな。集団レイプ映像はかなりの金になるんだ。泣き叫べば泣き叫ぶほど値が付く。あの分だと、こっちにも少しは金が流れてくるかな」
カケルが喋り終わるのが早かったか、流の拳が飛ぶのが早かったか。二人の身体が大きく交差した。
攻撃を受けてよろめくカケルの手から、流は隙を突いて鉄パイプを奪い取る。振り回し、ビュンと音を立す鉄棒がギリギリまで目前に迫ると、カケルはおののき尻餅をついた。起き上がろうとする間もなく、流がマウントポジションをとる。
「いきり立つなよ。もう、何もかも遅いんだよ、流。楽しもうじゃないか。お前もまだ、子供なんだから」
高めの声で笑い出すカケルを、流はたまらず殴りつけた。
黒い感情が渦巻き始めた。少しずつ、心が闇に飲まれていく。
「昔の、お前の顔に戻ってきたな。そうでなくちゃ」
流を見上げ、カケルは不敵に笑った。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１５：破壊願望者

相手に優勢をとられながらも、カケルは余裕だった。まるで、流が本気になるのを待ち望んでいたのかのように、更に挑発を続ける。

「女の携帯の場所をＧＰＳで突き止めて来たんだろ。まぁ、そうでもしなきゃ、ピンポイントにここに来れるはずがないけどね。あの機種が便利屋や派遣業界で人気なの、知ってんだよ。だけど、そこに女がいるかどうかまでは確認できなかったわけだ」

そこまで言うと、カケルは倉庫の隅にいる少年の一人に目をやった。十五歳ほどの彼の手には、見覚えのある携帯電話が握られている。薄暗闇に光るクローバーのストラップはまさしく、なぎさのものだ。

流は驚き、目を見開いた。動きが止まる。

「勘違いするなよ。最初の電話をかけた時点では、相手がお前だなんてわからなかった。個人的な恨みがお前の会社にあったわけでもない。着信が何度も鳴って、画面にお前の名前が表示されたのを見て初めて、あの日お前が引き取られた先だと確信したんだから。恨みを晴らすには、これほどの好機はないよ。飛んで火にいる何とやら、お前が自らここまで、しかも一人でやってくるなんてね」

「――だから、だからなぎさを売ったのか」

「まさかァ。売れそうな女がいたから売ったんだよ。当たり前だろ」

意識が飛んだ。

カケルの両腕を全体重をかけて抑えた。手が無意識のうちにカケルの喉元へと引き寄せられていく。カケルの胸の上に乗り上げた流は、真っ赤な顔で両手に力を入れた。

完全に、殺すつもりだ。少年たちが彼を止めようと、躍起になって流の身体を引き剥がそうとするが、岩のように固まり、ぴくりとも動かない。未完成な身体と未熟な力では、日々の重労働で鍛えられた流と対等にやりあうには不十分だった。

次第に青ざめていくカケルの唇。途切れ途切れの唸り声。
ふいに、流の背中に激痛が走った。金属バットが勢いよく背骨に当たり、バウンドする。悶え、よろめく流の足元から、少年たちがカケルを引きずり出した。
「大丈夫か、カケル」
背中をさすられ、息を整える彼を、流はまた床に転げた姿勢で見上げることになる。
「幾ら皮を被ったところで、凶暴なところは昔のまま、だな、流。どんなに綺麗事を言っても、お前の破壊本能は昔と変わらないんだよ」
のっそりと立ち上がったカケルは、再び流の枕元に立った。
「目的は何だ。カケル、お前らは一体、何をするつもりなんだ」
「やっと、やっと俺の名前を呼んだな」
にやりと唇の端を上げた。流の台詞に歓喜するように、カケルは乾いた声で笑う。
「記憶、戻ったか。思い出したのか」
「……さあ、それは、どうかな」
上体を起こしながら、流は鋭い眼光をカケルに向けた。

『ご覧下さい。自衛隊戦闘機、更に戦車まで出動しています。まるで戦争が起きてしまったような、物々しい雰囲気に包まれています。現場、半径五キロまで、避難警告が出ています。残っている方は、速やかに避難してください。繰り返します、現場、半径……』
パトカーの中で見る、携帯電話のワンセグ画面。雨に妨害され、偶に途切れながらも事実を伝え続ける。
ワイパーで消えていく雨の澱みの奥にも、黒く巨大なものがちらりと見えた。
「あんなもの、どうやって止める気だ」
後部座席で田村が呟く。
「自衛隊が下手に攻撃すれば、被害が広がるわね。何しろ、足元は

住宅街や商店街。飛散した部品や銃弾が、二次災害を起こすのは目に見えてる」
警察の無線の音とテレビ放送の内容、それから田村の台詞を交互に聞きながら、岬はパトカーを走らせた。雨が小康状態になり、少しは運転しやすくなったものの、今度は怪物騒ぎに混乱した一般市民の車が道を塞ぐ。サイレンを鳴らしても避けながら走るのが精一杯だ。
なぎさを連れ去った犯人は『未成年』――。不確かな証言に混乱する捜査本部。押収した廃屋のパソコンから出てくる新たな手がかりなど、捜査の様子が逐一、無線を通じて知らされる。黒い影の情報も、それに混じってチラホラと聞こえ出す。金属資源のブローカーが正体不明の工場に資源を横流ししていること、その工場に不透明な資金の流れがあること。黒い影の目撃情報の多くは、その工場付近に集中していること……。
「もし、あの黒い影の中に未成年がいて、それを操縦しているとしたら更に事態は複雑化するわよ。どうやったらあんな大きいものが動かせるか知らないけど、情報によると全部で五体、どれもかなりの大きさだってい言うじゃない。手出しできないまま暴れ続けられたら、街がなくなるわ」
「まあ、その点に関して言うと、ロボットにせよなんにせよ、必ず動力源があるはずだからエネルギーが尽きれば必ず停止すると思がね。絵空事のようなデカさのロボを作るには、相当の金が回ってると見た。未成年者だけで、あんなことが出来るなんて思えないな。もっと何か別の力が働いてるんじゃないのか」
「そういうものかしら。ねぇ、ところで、場所は？　こっちで合ってる？」
「あ、ああ。そこから右。港に出ればもうすぐだ」
一ノ瀬に渡された地図を確認し、携帯のワンセグ画面を閉じる。
「流、なぎさ。無事でいてくれよ」
祈るような気持ちで、二人は港を目指した。

汚れたつなぎ服の上半分を脱ぎ、腰に巻く。熱を奪い取る濡れたシャツを脱ぎ捨てる。鳥肌が立った。もしかしたら、熱があるのかもしれない。身体が紅潮して、息も荒い。それでも何とかして、奮い立つ。

全身傷だらけの流と、首に指の跡のくっきり残るカケル。倉庫の暗がりの中、二人の鋭い眼光がぶつかり合った。

「全てをぶっ壊してやりたいと思ったことがあるだろう。今みたいにさ。第一、この世界に希望なんてない。生まれてすぐに捨てられ、人知れず死ぬだけの命だ。それならばいっそのこと、全部壊して、めちゃくちゃにしてやると考えたことが」

暗く低い声で、カケルが言う。その言葉に賛同するように、カケルのそばに少年たちが戻っていく。年端のいかない子供が揃いも揃ってカケルに寄り添う様は、どこか宗教めいていた。気味が悪い。流は率直にそう思う。

「世の中には、いろんな種類の人間がいる。お前らみたいな偽善事業者、俺らみたいな破壊願望者。どちらの世界も両極端で、互いのことはよく見えない。だけど、どこかで繋がってる。そういうもんだろ」

「何が言いたい」

「需要と供給ってやつだよ。俺たちが女を売る。女をレイプして映像を撮影し、それを更に売る。そういう映像を好むやつがどんどん金を出す。その金を使って、俺らは全てを破壊するために必要な力を買う。その力は、マッドな研究者や技術者が提供してくれる。そのために必要な道具や部品を、更に俺たちがかき集める。――わかる？　循環型社会。グルグル回ってんだよ。その輪の中にお前らみたいのが時々混じって邪魔してくる。それが、気に喰わない」

こちらを睨み、唾を吐きかけた。カケルの行動に、流の怒りが更に増す。ぐっと抑え、話を聞くことに専念する。そのままカケルが全部喋って、なぎさの居場所を突き止められたら、彼女の携帯電話

を取り返して一ノ瀬か田村、岬のいずれかに連絡を取るのだと機会を窺っていた。
「あの巨人に、幾らかかってると思う？　どれくらいの人間がどれだけの期間関わってきたかなんて、お前に想像出来るか。規模が違うんだ、規模が。便利屋の下働きがどうこうできるレベルじゃないんだ。自衛隊？　警察？　やつらだって、どうせ俺らを捕まえられない。『保護法』がある限り、やつらは二十歳になってない俺たちに簡単に手出しできない。最高だね、日本。子供のうちなら罪を犯したい放題なんだぜ」
「だから、罪のない人間を殺してもいいっていうのか」
ギリギリと、流の奥歯が鳴った。怒りで身体が震えた。
「あそこで死んでた乳児も、その母親も。そしてなぎさも。何でお前らにもてあそばれなきゃならない。生きる権利は、幸せになる権利は、平等に与えられるもんじゃないのか」
真剣な流の言葉。それを大声で笑い飛ばすカケル。
「馬鹿だな、ホント。何が幸せだ。権利？　なんだそりゃ。――そんなもんがあるなら、とっくに俺らはまともになってるはずだろうが！」
大きく足を蹴り上げた。ふらふらになった流の腹部に、思い切り膝が入る。
「殺れ！」
カケルの掛け声に、再び少年たちは思い思いの武器で流を攻撃し始めた。
度重なる攻撃で、流に体力は殆ど残っていなかった。避けようと身体を動かせば動かすほど、やつらはそこを狙って攻撃してくる。骨が痛い、内蔵がやられたのか、口から血が止まらない。
それでも抵抗した。幼い少年たちを殴り、蹴散らし、投げつける。保護法なんて、流には関係ない。本気で殺しに来る少年らに法律を盾にする権利があるのかどうかさえ、疑わしい。捕まっても、死刑になっても構わない。今はただ、目の前の敵を倒してなぎさの所在

を確かめなければという想いだけが先行した。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１６：突撃

『田村か。俺だ。今、捜査本部の刑事さんたちから説明があった。なぎさの居場所がわかりそうだ。あのパソコンに入ってた情報の中から、持ち主をある程度特定したらしい。何でも、前々から女性誘拐、行方不明事件を捜査してた別の部署の情報と、今回の犯人の情報が合致したとか何とか。恐らく、バラバラ殺人と乳児遺体遺棄はそいつらがやったとみて間違いない。――だが、妙なことを言っていた。犯人は未成年じゃない。もう十年以上追いかけてる。三十から四十代の男性数人組だとも』

「じゃあ、流の言ってた、未成年ってのは……」

『別の事件が絡んでるんだろうよ。でなきゃ、下っ端か。流のいると思われる港の倉庫には、なぎさはいない可能性が高いとよ』

社屋に残った一ノ瀬からの電話に、田村は驚きを隠せなかった。

「なぎさは、こっちにはいないそうです」

運転席の岬に電話の内容を簡単に伝えた田村は、どうしたらいいのかと頭を抱えた。二人いっぺんに助けられるとばかり思っていたのだ。

「それでも、流君はいるんでしょ。向かいましょう」

港に入る。パラパラと雨のちらつく中、無機質な倉庫の連なる通りをサイレンを消して進んでいく。田村の携帯を通じ、一ノ瀬がなぎさの携帯のＧＰＳ情報を頼りに誘導する。そこに、恐らく流がいると信じて。

「せめて、相手が何人か分かれば。私たちだけじゃ心細いわね。応援が来るまで待つにしても、時間がかかればそれだけ危険度が増すし」

パトカーから降り、銃を構えながら、岬はあちこち見渡した。人気のない港。この騒ぎで人影もない。

一ノ瀬の会社に部下を置いて来たことを後悔した。だがあの時、

誰かを残さねばならなかった。犯人からの接触の可能性のある中、便利屋の人間だけにしておくわけにはいかなかったのだ。
「お、刑事さん。丁度いいものがありますよ」
田村の視界の先に、使い慣れたものが見えた。田村はそれに近寄り、鍵が挿しっ放しであることを確認すると、にやりと笑を浮かべた。
「窃盗罪で逮捕とか、やめてくださいよ。ちょっと拝借させてもらうだけですからね」

薄暗い倉庫の中に、少しずつ日が差し始めた。雨が弱まり、天気が回復してきたのだろう。天窓から差し込んだ光が流とカケルを照らした。二人とも立ってはいたが、血だらけでボロボロだった。気力だけで立ち尽くしているような、そんな気配すらする。
足元には子供たち。流に倒され、胸のドクロマークを上に向けて、重なるように転げている。それまで何が起きたのか、想像するに難くない。
「有罪確定だね。もう、日の光の下を歩けない。女を救っても、未来なんかないよ」
カケルはなぎさの携帯をちらつかせて、また笑う。
「そのへらへらした笑い方が嫌いだったんだろうな、昔の俺は」
肩で息をして、ふらふらした足と腹をさする流。もう痛みという感覚さえ、麻痺して分からなくなってきていた。
「記憶障害だと言われたことはある。昔親に放置され、それが原因で情緒不安定だったこともあった気がする。だけど、都合の悪いことをこんなに綺麗に忘れていたなんて、かなりショックだったな」
「傷付けられたことばかり鮮明で、傷付けたことを忘れていた……？　随分都合がいいね」
「それはお互い様だろ、カケル。早く教えろよ。なぎさはどこだ」
「教えてどうする。救い出すつもり？　全てが遅かったとしても。たくさんの男になぶられ、イッた挙句に知り合いの男に助け出され

たところで、女の精神状態がどんなものか。想像したことなんてないだろ。自殺するよ、あの女。確実にね」
話をすればするほど、カケルたちのしたことの恐ろしさが分かってくる。
こうして連れ去られ、どこに行くことも出来ず、雌豚として飼い馴らされ、孕まされた上、子供は捨てられ、女は殺され、バラバラになって捨てられるのか。流にも事件の全体像が見えてきた。そこにある狂気さえも。
「それでも、救いたいと言ったら？」
「救えると信じてるのか」
カケルの、最後の問いに答えるべく口を開けた。その声の出る間もなく、二人は屋外から聞こえる重機の動く音に動きを遮られる。
聞き覚えのある音だ。一定間隔でリズミカルに動く重機。逆関節の足に、大きなアーム。流の胸は歓喜に踊った。
「ユンボだ！　人型ユンボ」
轟音が鳴り響く。メキメキと扉と壁が潰されていく。柔らかい日差しとまだ小降りの雨が一気に屋内に流れ込んでくる。バラバラと落ちてくる壁材は倒れた少年らの寸前で上手く止まり、開いた穴から大きな黄色いショベルが覗いた。
「田村さん、田村さんだよね！」
流の表情が急激に明るくなる。相手に見えているかどうかなど構わずに、流は必死に両手を振った。
「流、無事かー！」
壁越しに聞こえるのは、確かに田村の声だ。
「ここの修理代、一ノ瀬に請求が行くと思うけど、いいかしら」
岬の声もする。
助かったと、思った途端、全身の力が抜けた。流はそのまま床に座り込んだ。
壊れた扉の間から、田村と拳銃を構えた岬が現れる。見るも無残、少年たちと流の傷付き具合、散乱する凶器や血痕から何が起きたか

を推測し、田村たちは息を呑んだ。なぎさの姿はそこにはない。
「流、大丈夫か。なぎさは、なぎさはやっぱり、ここにはいないのか」
意識の朦朧としかけた流に、田村は尋ねた。首を横に降り、涙を流すその身体のあちこちに、火傷や打撲傷が大量にある。裸になった上半身には、彼の吐き出したと思われる血の跡が乾いて残っていた。
「重傷じゃないか」
声をかける田村に、流は再び首を振る。
「それより、なぎさを。なぎさを救ってやってくれ。強姦されてるかもしれない。殺されるかもしれない。なぎさを、なぎさを早く」
涙と血が、頬で混じった。
「他に、意識のあるヤツはいないのか。まさか、お前一人で全員殴り倒したんじゃ」
「いや、カケルがいたはずだ。さっきまでそこに――」
見渡したが、カケルの姿がない。騒ぎに便乗して逃げたのか。
「それは、彼のこと？　逃げようとしてたところを捕まえておいたわよ」
岬刑事の腕に引かれ、倉庫の出口付近から傷だらけの少年が現れた。決まり悪そうにうつむき、視線をそらしている。カケルだ。
「流君は名前を知ってるようだけど、あなたたちどういう関係なの。なぎささんの拉致と、関わりがあるの」
きつい言葉を避けながら、岬は尋ねた。
カケルは岬から腕を引き剥がし、汚いものにでも触れたように腕を黒いTシャツに拭う。途端に、隠し持っていたなぎさの携帯電話が床に転げた。クローバーのストラップが田村の足元に向いて止まる。
「お前が、なぎさを拉致したのか」
「だとしたら？」
静かな田村の怒りに、カケルは背筋を凍らせた。目をきょろきょ

ろさせ、逃げ出す機会を窺っている。
「――知らないよ。女がどこにいるかなんて。幾ら脅したって無駄さ。ホントに知らないんだから」
「カケル、それ、どういうことだよ！　お前、知ってるわけじゃなかったのか！」
飛び出しそうになる流の身体を、田村のがっちりした腕が引き止めた。
「恐らく、彼らはバラバラ殺人とは無関係よ。本当の黒幕は別にいるってことでしょ。集団強姦目的の犯罪グループ、そこになぎささんを売ったのね」
「まあ、そんなとこだよ。警察、そこまで知ってんだ」
「殺人行為に直接関与していないことが分かれば、それで十分よ。で、ついでに聞くけど、あの黒い影や金属盗難に、あなたたちは関わってた？　世間では『黒い影』と呼ぶあの物体を、あなたたちは『巨人』と呼んだそうじゃない。関係が、ないとは言わせないわよ」
再び、岬の手がカケルの腕を掴んだ。女性とは思えない力でぐいぐいと握り締める。
「どうなの。本当は、どこかで悪い大人たちに踊らされていたんじゃないの。あなたたちだけで起こせるような事件じゃないでしょ」
「……どこまで掴んでんの、警察は。俺らから、どういう情報を掴みたいわけ？」
一丁前に岬と取引する気だ。カケルの目もまた、真剣だった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１７：幸せになれる権利

「あの『黒い影』――もとい『巨人』は、完成形じゃないわよね。色もなく、半端なデザイン。何より、操縦者のレベルが著しく低い。真っ直ぐ歩くことも、物を掴むこともままならない。まるで子供が面白半分に玩具を操作しているような、そんな危なっかしさがある。それでも、あの大きな身体でなら動いて暴れるには丁度いい。そんな感じがする。まさかとは思うけど、あなたたちのような少年が、訓練もなしに操縦しているなんてことは……、あったり、する？」

憶測で物を言うのは好きではない岬だが、思わず私見で話してしまう。少し、後悔した。が、それでカケルの心が引き出せるなら、それでもよいと思った。

カケルは岬からそっと、視線を外した。岬の掴んだ腕を無理やり引き剥がし、その跡をさすりながら壁の隙間から差し込む日の光の道を、細くすぼめた目でじっと追う。起伏のない表情では、彼が何を考えているのか計り知ることすら難しい。

「確かに、思ったよりぎこちないのは計算外だったよ。あいつら、『操作は簡単ですから』とか何とか言ってたくせに」

「――やっぱり、何か別のものが絡んでるのね。しかも、操縦者は未成年。直接攻撃は不可能ということね」

懐から携帯電話を取り出し、ダイヤルする。相手に繋がるまでの間、岬は更に追求を続ける。

「なぎささんの誘拐にしろ、巨人にしろ、あなたたち、結局いいように操られてるだけじゃない。本当に悪いやつらは表舞台には絶対現れない。でしょ？　カケル君、あなたの証言が必要なのよ。事件を解決させたいの。協力して、くれる？」

「悪いけど、そうそう簡単には……いかないと思うよ」

カケルは数歩後ずさりし、岬の間合いから完全に離れていた。

丁度、岬と田村がこじ開けた扉の隙間、逆行を背負うようにして

立つカケルの表情は見えない。
「ちょっと、何を言って――、もしもし、こちら岬です。捜査本部ですか。今、犯人の一人と接触を」
会話が始まってしまった。カケルの様子がおかしいと分かりつつも、岬はどうにも出来ない状態にいらだった。
「お前、逃げるのか」
田村が流と岬の前に進み出て腰を低く落とし、カケルを牽制する。
カケルはうつむき、にやりと笑った。そして、ズボンの後ろポケットに隠し持っていた二つ折りナイフをおもむろに取り出し、掲げる。
「カケルお前、そんなもの持って……！」
田村の後ろで流の驚く声が聞こえると、カケルは目を細めた。
「さっきまで、何で使わなかったって？　それは多分、俺の良心だよ。妬ましい、憎らしいヤツだと本気で思ったけど、どこかで流、お前のことが本気で羨ましかった。何であの日、便利屋に引き取られたのが俺じゃなくてお前なんだとずっと考えていたんだ。そして狂気に満ちていた過去のお前が別人のように丸くなったなんて、信じられなかった」
ナイフの切っ先が、カケルの腹部に向く。
「もし、お前の言うように『幸せになれる権利』なんてものがあるとしたら、俺はどこでそれを失ったんだろう」
流の手が、田村を突き飛ばした。
これでもかというくらい勢いをつけて、瓦礫と倒れた少年たちを飛び越えた。
カケルの手を、止めなければ。よじれた腹の中から、再び血が食道を逆流する。大きく振ったつもりの手が、半分までしか動かない。それでも、一ミリでもいい、カケルの手に届いて、ナイフをそこから離さなければと。
――生温かい赤いものが飛び散った。
カケルの懐まで手が伸びたのに、間に合わなかった。深く刺さっ

たナイフの先、抜けぬよう、抱え込むようにして、カケルの身体が流の上に落ちてくる。
目が合った。悲しそうな瞳が、薄暗い中でもはっきりと流の目に映った。
「救急車、救急車を、急いでこちらに回してください！　犯人が自決を――！」
岬の悲痛な叫び声が、倉庫中に響き渡った。

連絡を受け、港の倉庫に警察と救急車が次々に到着した。
黒いシャツの少年たちも、流も、怪我の程度に差はあったが、皆病院送りとなった。
「肋骨、折れてますね。痛みますか」
救急隊員に言われて初めて、骨折を知る。そんな痛みなど分からぬほど、全身傷だらけだったのだ。
流は、事件の全容を知らないまま病院に行くことを初めは承知しなかった。なぎさを自分が救いにいくのだと、そんな状況でも必死に喚いた。田村たちの説得で渋々救急車に乗り込み、横になる。付き添いで田村が一緒に乗り込んでくれることで、流の高揚した心は、少しずつ穏やかさを取り戻していった。
「カケルは、助からないそうだ。腹を刺した後、更にナイフを動かしていたらしい。最初から死ぬつもりだったとしか思えないな」
応急処置をしようにも、腹部の傷は塞ぐことも出来ない。素人の流や田村は、傷が広がらぬようカケルの身体を横にして人工呼吸を試みたが、腹部からは滝のように血が流れ出ていた。真っ赤に染まっていくコンクリの床。騒ぎで目を覚ました数人の少年たちは、顔を青くして震え上がっていた。
自分たちのしてきたことが、死とはどんなものなのか、その少年たちは初めて知ることになる。
「田村さん。なぎさは、なぎさは助かると思う？」
呼吸器を付けられ、弱々しく尋ねてくる流に、田村は優しく微笑

んだ。
「俺たちが無事を信じないで、誰が信じるんだ。きっと、無事だよ。そうに決まってる」
「カケルが言ってた。もし救い出しても、彼女は自殺するって。そしたら俺は、どう接すればいい。彼女に何て声をかければいい」
「さあねぇ。それは俺も知りたいよ」
助かればの話だがな、と、田村は口の中で呟き、台詞を飲み込んだ。
応急処置をしてくれる救急隊員と、田村の顔を交互に見上げ、流は目を閉じた。救急のサイレンが延々と頭を巡り、車の走る振動と一緒になって子守唄のように流を夢の中へといざなった。
たった半日間の出来事が、あまりにも濃厚で飲み込みきれない。それどころか、なぎさの救出も黒い影の騒ぎも未だ解決せず、暗礁に乗り上げている。発端となった乳児遺体を見つけたのが流だったとしても、彼に捜査する権限は一切ない。所詮は一市民で、新聞やニュース画面で事件の経過を知り、ただ頷くだけ。今回の事件だって、最終的にはそうなるに違いないのだ。
『次のニュースです。警視庁は――日午後、集団強姦の疑いで、本籍東京都……容疑者ら五人を逮捕しました。調べでは今月……日、――区の廃屋解体の現場で作業中の会社員の女性を拉致の上監禁……』
『――日未明、いわゆる黒い影に警視庁特殊急襲部隊、ＳＡＴが突入、ロボットを操縦していた少年らを逮捕しました。調べによると少年らは、総合リサイクルセンターでの金属資源盗難にも関与しており、今後はロボットの入手経路を……』

Ｅｐｉｓｏｄｅ１８：穢れなき子供たちへ

汗ばんだ九月の風も、十月になると急に冷たくなる。街路樹が紅葉し始め、行きかう人々の服装も徐々に秋色に変わってゆく。秋の長い雨の日が終わって、雲ひとつない晴天の日を迎えていた。

肋骨骨折全治二ヵ月。内臓の一部を損傷したうえ手術後安静を強いられて、一週間前にやっと退院できたばかり。けが人の流は特に仕事もさせてもらえず、一ノ瀬と共に社屋で留守番をする。

「事務を覚えるにはいい機会じゃないか」

とてもじゃないが、事務机に向かって文字やパソコンに一時間以上向き合うと眠気がする。頭より身体を動かすのが主だった流にとって、これほど辛いことはない。それでも、一ノ瀬の手取り足取りで少しずつだが覚えてきた。

「新しい事務の人、雇えばいいのに。俺じゃとてもじゃないけど勤まらないよ」

深いことを考えもせずにすぐに口に出す流を、一ノ瀬は渋い顔で怒鳴った。

「事務は雇わん。そんなことしたら、なぎさが帰りづらくなるじゃないか」

事件から既にひと月が経っていた。

最終的に、なぎさは救い出されたが――、遅すぎたのだ。最悪のケース。一ノ瀬たちに、心身ともに傷ついた彼女を慰める手立てはなかった。緊急避妊にカウンセリング、そして療養。回復の見込みはまだない。

元々異性には奥手だった彼女の秘密を、事件後、一ノ瀬は流たちに告げた。

「義理の父親による強姦で、彼女は中学の頃、子供を産んでいたそうだ。その子は赤ちゃんポストに入って、どこか遠くの知らないところで幸せになっているはずだと、話してくれたことがあったよ。

ただでさえ男性不信だったのに、彼女は男だらけの職場で気丈に働いた。明るく振舞っていた。その過去を蒸し返すような出来事でなぎさの受けた傷は深く、簡単には立ち直れないだろうという話だ」
なぎさの席を取っておくのは、一ノ瀬なりの優しさなんだろうと流は思う。事務机もロッカーも、彼女の気に入りのコーヒーカップも、事件などなかったかのように整然と居座っている。
一時は新聞の一面記事を独占した黒い影のニュースは、いつの間にか消え去っていた。街に放置された機体も、最後の一つが先日解体されて運び出された。後に残ったのは壊れた街と、ほんの少しの記憶。規模の大きい台風に巻き込まれたと思えば、納得できなくもないような程度だ。
それでも時々、思い出したようにニュースが流れる。
資源ブローカーと謎のロボット製作会社の存在、少年グループとの関係や資金の流れ。少しずつだが解明している。先に捕まった集団強姦の犯人グループの証言で、カケルたち未成年を使った資金集めの実態が明らかになると、ワイドショーはこぞって『利用された少年たち・彼らを犯罪へと導くものは何か』などと銘打って、特番を組む。
実際、カケルたちが捕まっても、金属資源の盗難はなくならなかった。別の少年グループがまた関与しているのかどうか。また黒い影のようなものが現れる可能性を示唆しているのか。
結論の出ない押し問答にも、そろそろ飽き飽きしてきた。
「映画や小説みたいに、事件の最初から最後まで関われるわけないんだよ、一般人は。流、お前も災難だったな。まさか、また同じようなことが起こるんじゃないかとか、思ってんじゃないだろうな」
社長席にいつもの如くでんと座り、組んだ足を机の上に放り投げて一ノ瀬は流を馬鹿にした。
「勘弁してくれよ。ああいうのはもう、こりごり。主人公生活はもう終わりでいいって」
やる気のない流は、そう言って事務机に伏す。

あの時の胸の高鳴りは確かに心地よかった。普段のいらいらと募ったストレスも全て砕け散ってしまうくらい、のめりこんでいた。区役所の江川が言うように、あんな事態でもどこかで楽しんで笑う自分がいたのだと、全てが終わってから理解する。だが、あの小さく色褪せた手のひらと、真っ赤な海に沈むカケルの死に顔を思い出すと、それは不謹慎で愚かしい行動以外の何物でもなかった。

いい加減、今日の仕事にも飽き、机に伏したまま鉛筆を転げているところに、チャイムが鳴った。

「お客だ。流、出て来い」

渋々立ち上がり、玄関口へと足を向ける。

観音開きの曇りガラスの扉、開け放したドアの半分から、女性の姿が見えた。

「いらっしゃいませ。便利屋一ノ瀬に何か御用ですか」

女性は軽く会釈をし、

「こんにちは、流君。大分元気になったみたいね」

とにこやかに笑った。岬刑事だ。長いマフラーとストレートヘアが風に揺らめいている。

「久しぶり。元気だよ。身体はね」

流は照れ笑いし、応接コーナーに案内した。

給湯室で流が慣れないお茶汲みに奮闘している間、岬は一ノ瀬と二人、向かい合って話をした。事件以後、電話で連絡を取り合っていたものの、会うのは久しぶりだった。

「区役所の江川によると、区が管理する持ち主のいなくなった廃屋や廃ビルで、次々に謎のパソコンや記憶媒体が見つかっているらしい。今、その対処に追われてるんだとか。最初にあんなグロ映像を見つけてしまったのはウチの会社の連中だが、それは偶然だった可能性もあると思う。刑事さんは、どう見る？」

本数を少なくしたタバコをふかしながら、一ノ瀬は真剣な眼差しで岬に考えをぶつけた。

「偶然を装った必然、かも知れないわね。過去の依頼を洗いざらい

探してみる必要はありそうだわ。案外、ちょっとしたことが引き金になっていることもあるものよ」
「それは俺も考えた。カケルとかいう少年が中心で起こしたなぎさの誘拐も、元を辿れば俺が施設から流だけを引き取ったことが原因だったらしい。俺はただ、自分が見つけたあの小さな子供を、なんとかして一人前の真っ当な大人に育てたかっただけだったんだがなァ。まさか、妬みからあんな事件に発展していくなんて。人の心は、理解できんもんだね」
テーブル上の灰皿に、火をつけて間もないタバコを捨てる。ぐりぐりと先端をこねるようにして火を消し、一ノ瀬はやり切れなさそうに大きく溜息をついた。
「刑事さんは、ダンナや子供はおらんのか」
「私、ですか」
岬は一瞬声を詰まらせる。が、すぐに、
「今は、一人ですよ。昔はいたんですけどね」
寂しそうなその声に、一ノ瀬はしまったと薄い後頭部をかきむしった。
「子供は死産して、墓にいます。こんな仕事でしょ、上手くいかなくて。まともに子供が埋めない身体なんですよ。だから、正直今の部署にいるのは辛いんですよね。かわいそうな子供たちを相手にすると、彼らが自分の子供だったらと、こんな私でも胸が痛くなるんです」
変な話をすみませんと、彼女は一ノ瀬から視線をそらした。うっすらと浮かべた涙が、小さく光っていた。
給湯室からコーヒーの甘い香りが立ち込め、慣れない手つきでお盆を持つ流が現れる。「お口に合うか分かりませんが」などと、どこで覚えたのか変な言葉遣いでカップを差し出した。
「田村がね、『岬刑事には何かある』と言うもんでね。そういう事情でしたか」
何かを納得したように、一ノ瀬は何度も頷く。

話の読めぬ流は、いぶかしげに一ノ瀬の顔を覗き込み、頭をかしげながら少し離れた事務机の椅子に腰掛けた。
「そういえば、流、施設の園長にこの間、会ってきたぞ」
斜め後ろの流を振り向いて、一ノ瀬が言う。
「お前のことをえらく心配してた。事件の後、手が付けられなくなってやしないかって。『流ももうすぐ二十歳、大人ですから心配無用』と伝えたが。……言い過ぎたかな」
「……余計なお世話だよ」
「ついでだから、あのカケルという少年のことも尋ねてきた。いろいろあったらしいな。お前ら」
久々に聞いたカケルの名前に、流はピンと反応して、顔を上げた。
「やはり、あの少年と流君は、古くに付き合いがあったのですか」
と、岬。
「ああ。彼もまた生まれて間もなく親に捨てられ、その施設に引き取られたらしい。物心付いてから預けられた流は、年下のカケルに相当辛く当たったんだと。情緒不安定な流が執拗ないじめを繰り返し、その上何度も警察沙汰になりかけたんだとか。今、あんなに落ち着いてるのは一ノ瀬さんのお陰ですよと褒められちまったよ」
最後の台詞はいらないな、と思いながら、流はカケルの最期の台詞を思い返していた。
『もし、お前の言うように『幸せになれる権利』なんてものがあるとしたら、俺はどこでそれを失ったんだろう』
寂しそうなその台詞は、もしかして、自分のものだったかもしれない。幼い日に一ノ瀬に救われ、引き取られて便利屋で働くことになっていなければ、きっとカケルのように闇の世界へと入っていたのだろうと。
思えば思うほど、涙が溢れ出た。なぜ泣くのか、自分でも分からぬほどに。

この、不条理な世界。
無垢なる子供の心をもてあそぶ世界。

心穢れなき子供たちへ。
願わくば、等しく幸せでいられますように。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1652f/

穢れなき子供たちへ

2011年6月12日08時40分発行